

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄						備考			
計画の区分	学部の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン ニッポンタイイクダイガク 学校法人 日本体育大学									
フリガナ大学の名称	ニッポンタイイクダイガク 日本体育大学 (Nippon Sport Science University)									
大学本部の位置	東京都世田谷区深沢7丁目1番1号									
大学の目的	日本体育大学は、学校教育法（昭和22年法律第26号）に規定する大学の目的と方針に則り、広く知識を授け、深く保健体育及びスポーツに関する学術と実際を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を錬磨し、創造性に富み、国際的視野をもった教養高き人間を育成するとともに、広く人類の健康の増進及び福祉の充実に、スポーツ文化の向上及び体育の発展に貢献することを目的とする。									
新設学部等の目的	高度な専門知識・技術と、豊かな人間性、高い倫理観を備えた質の高い柔道整復師の養成と現代社会の要請と医療・保健のニーズに応える高度な知識と高い技術を持った救急救命士を養成する。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	保健医療学部 [Faculty of Medical Science]	年	人	年次人	人		年月第年次	神奈川県横浜市青葉区 鴨志田町1221番地1		
	整復医療学科 [Department of Judo Therapy and Medical Science]	4	90	—	360	学士 (整復医療学)	平成26年4月 第1年次			
	救急医療学科 [Department of Emergency Medical Science]	4	80	—	320	学士 (救急医療学)	平成26年4月 第1年次			
計		170	—	680						
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	なし									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計					
	保健医療学部 整復医療学科	56科目	9科目	20科目	85科目	129単位				
救急医療学科	56科目	5科目	14科目	75科目	129単位					
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等		
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	人	
			人	人	人	人	人	人	人	
	新設	保健医療学部 整復医療学科	5	3	2	0	10	0	9	
			(5)	(2)	(2)	(0)	(9)	(0)	(3)	
			救急医療学科	7	1	2	1	11	0	13
	(7)	(1)		(2)	(1)	(11)	(0)	(3)		
	計		12	4	4	1	21	0	22	
			(12)	(3)	(4)	(1)	(20)	(0)	(6)	
	既設	体育学部 体育学科	18	20	0	5	43	9	107	
			(18)	(20)	(0)	(5)	(43)	(9)	(107)	
			健康学科	14	11	0	0	25	5	12
				(14)	(11)	(0)	(0)	(25)	(5)	(12)
武道学科				9	6	0	2	17	2	37
	(9)	(6)	(0)	(2)	(17)	(2)	(37)			
社会体育学科	8	9	0	1	18	7	19			
	(8)	(9)	(0)	(1)	(18)	(7)	(19)			
計		49	46	0	8	103	23	175		
		(49)	(46)	(0)	(8)	(103)	(23)	(175)		
分	児童スポーツ教育学部 児童スポーツ教育学科	17	12	0	4	33	4	14		
		(14)	(12)	(0)	(4)	(30)	(4)	(5)		
		計		17	12	0	4	33	4	14
		(14)	(12)	(0)	(4)	(30)	(4)	(5)		
合計		78	62	4	13	157	27	211		
		(75)	(61)	(4)	(13)	(153)	(27)	(186)		

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		# (82)	# (16)	# (98)					
	技 術 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	図 書 館 専 門 職 員		9 (9)	0 (0)	9 (9)					
	そ の 他 の 職 員		12 (6)	0 (0)	12 (6)					
	計		103 (97)	16 (16)	119 (113)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	126,951.32㎡	0㎡	0㎡	126,951.32㎡	大学全体				
	運 動 場 用 地	80,088.44㎡	0㎡	0㎡	80,088.44㎡					
	小 計	207,039.76㎡	0㎡	0㎡	207,039.76㎡					
	そ の 他	59,759.14㎡	0㎡	0㎡	59,759.14㎡					
	合 計	266,798.90㎡	0㎡	0㎡	266,798.90㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
		62,801.20㎡ (62,801.20㎡)	0㎡ (0 ㎡)	0㎡ (0 ㎡)	62,801.20㎡ (62,801.20㎡)	大学全体				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	55室	42室	40室	4室 (補助職員 1人)	0室 (補助職員 1人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数						
		保健医療学部		21 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書 477,627 [123,935] (475,627 [122,935]) 学術雑誌 6,509 [1,364] (6,509 [1,364]) 電子ジャーナル 5,855 [5,010] (5,855 [5,010]) 視聴覚資料 54,100 (52,100)		
	保健医療学部	4,411 [59] (4,411 [59])	43 [10] (43 [10])	2 [2] (2 [2])	3 (3)	1729 (1729)	31 (31)			
	計	4,411 [59] (4,411 [59])	43 [10] (43 [10])	2 [2] (2 [2])	3 (3)	1729 (1729)	31 (31)			
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数			大学全体		
		3,128㎡	640		562,000					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要					大学全体		
		42,796.15㎡	野球場、サッカー場、ラグビー、陸上競技場、屋外温水プール							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書費には電子 ジャーナル、デー タベースの設備費 (運用コスト含 む)を含む
		教員1人当り研究費等		750千円	750千円	750千円	750千円	—	—	
		共同研究費等		10,000千円	10,000千円	10,000千円	10,000千円	—	—	
		図書購入費	20,311千円	5,000千円	5,000千円	5,000千円	5,000千円	—	—	
	設備購入費	271,595千円	5,000千円	5,000千円	5,000千円	5,000千円	—	—		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	整備医療学科	1 8 6 0千円	1 5 6 0千円	1 5 6 0千円	1 5 6 0千円	— 千円	— 千円			
	救急医療学科	2 0 1 0千円	1 7 1 0千円	1 7 1 0千円	1 7 1 0千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金等							

既設大学等の状況	大学の名称	日本体育大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	体育学部						1.26		
	体育学科	4	620	—	2480	学士(体育学)	1.30	昭和24年度	東京都世田谷区深沢七丁目1番1号
	健康学科	4	160	—	640	学士(体育学)	1.23	昭和37年度	神奈川県横浜市青葉区鴨志田町1221番地1
	武道学科	4	120	—	480	学士(体育学)	1.15	昭和40年度	
	社会体育学科	4	160	—	640	学士(体育学)	1.23	昭和50年度	
	専攻科	1	20	—	20	—	0.36	昭和46年度	
	児童スポーツ教育学部						1.05		
児童スポーツ教育学科					学士(児童スポーツ教育学)	1.05	平成25年度		
児童スポーツ教育コース	4	150	—	600		1.06			
幼児教育保育コース	4	50	—	200		1.02			
既設大学等の状況	大学の名称	日本体育大学女子短期大学部							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
専攻科保育専攻	1	50	—	50	—	0.71	平成18年度	東京都世田谷区深沢七丁目1番1号	
既設大学等の状況	大学の名称	日本体育大学大学院							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	体育科学研究科 体育科学専攻(博士前期課程)	2	25	—	50	修士(体育科学)	1.40	昭和50年度	東京都世田谷区深沢七丁目1番1号
体育科学専攻(博士後期課程)	3	6	—	18	博士(体育科学)	1.45	平成9年度		
附属施設の概要	<p>名称：体育研究所 目的：体育・スポーツに関する研究 所在地：東京都世田谷区深沢七丁目1番1号 設置年月：昭和37年4月 規模等：242.37㎡（東京・世田谷キャンパス 教育研究棟G階） 名称：スポーツ・トレーニングセンター 目的：学生の体力向上及びトップアスリートの競技力向上 所在地：東京都世田谷区深沢七丁目1番1号 神奈川県横浜市青葉区鴨志田町1221番地1 設置年月：昭和39年2月 規模等：990.56㎡（東京・世田谷キャンパス スポーツ棟1階） 1,874.24㎡（横浜・健志台キャンパス 百年記念館1階）</p>								

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の場合、収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教 育 課 程 等 の 概 要

(保健医療学部 整復医療学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学部 共通 科目	医療英語Ⅰ	1前	1					○							兼2	
	医療英語Ⅱ	1後	1					○							兼2	
	英語コミュニケーションⅠ	2前	1					○							兼2	
	英語コミュニケーションⅡ	2後	1					○							兼2	
	小計(4科目)	—	4	0	0			—		0	0	0	0	0	兼2	
	現代社会と憲法	1前		2				○								兼1
	変貌する社会と医療	2後		2				○								兼1
	こころと行動の科学	1前		2				○								兼1
	生命の科学	2前		2				○								兼1
	社会と人間生活	2前		2				○								兼1
	スポーツ人類学	1前		2				○								兼1
	科学思想史	1前		2				○								兼1
	文学と人間	2前		2				○								兼1
	発育発達論	2前		2				○								兼1
	小計(9科目)	—	0	18	0			—		0	0	0	0	0	兼8	
	総合科目	日体大の歴史(日体伝統実習を含む)	1前	2					○							兼1
		野外活動実習	1前	1										○		兼2 集中・共同
	小計(2科目)	—	3	0	0			—		0	0	0	0	0	兼3	
	数理学系・情報	数理科学	1前		2				○							兼1
		統計学	1後		2				○							兼1
	情報機器の操作	2前	2					○							兼1	
小計(3科目)	—	2	4	0			—		0	0	0	0	0	兼3		
生物学系	基礎生物学	1前	2					○				1				
	細胞生物学	1後		2				○				1				
小計(2科目)	—	2	2	0			—		2	0	0	0	0	0		
体育学系	アスレティックトレーニング(基礎)	1前		1											兼5 オムニバス	
	アスレティックトレーニング(応用)	2前		1											兼5 オムニバス	
	コンディショニング	3前		1											兼5 オムニバス	
小計(3科目)	—	0	3	0			—		0	0	0	0	0	兼5		

教 育 課 程 等 の 概 要

(保健医療学部 整復医療学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
健康科学	栄養学 (スポーツ栄養学を含む)	1前	2			○									兼1	
	発育と発達	1前	2			○									兼1	
	加齢学	3後	2			○									兼2	
	生化学	2前	2			○			1							
	小計 (4科目)	—	8	0	0	—			1	0	0	0	0		兼4	
	人間の構造と機能	解剖学Ⅰ (解剖見学実習を含む)	1通	4			○									兼2
		解剖学Ⅱ	2前	2			○									兼2
		生理学Ⅰ	1通	4			○			2						
		生理学Ⅱ	2前	2			○			3						
		運動学	2前	2			○									兼1
		運動学実習	3前		1				○							兼1
		小計 (6科目)	—	14	1	0	—			3	0	0	0	0		兼3
疾病と傷害	病理学総論	2後	2			○									兼1	
	病理学各論	3前	2			○									兼1	
	一般臨床医学	2後	2			○									兼1	
	神経内科学	3後		2		○									兼1	
	外科学概論	2後	2			○									兼1	
	精神医学	3後		2		○									兼1	
	救急医学	2後		2		○									兼1	
	整形外科	3前	2			○									兼1	
	スポーツ整形外科	4前		2		○			1							
	リハビリテーションⅠ	2後	2			○									兼1	
	リハビリテーションⅡ	3後	2			○									兼1	
	医用画像読影学	3後		2		○									兼1	
小計 (12科目)	—	14	10	0	—			1	0	0	0	0		兼8		
保健医療福祉と 柔道整復の理念と	関係法規	3前	2			○				1						
	医学概論	1前		2		○			2						兼3	
	医療危機管理	3後		2		○									兼1	
	衛生学・公衆衛生学	3前	2			○									兼1	
	障害者保健学	4前		2		○									兼1	
	高齢者保健学	4前		2		○									兼1	
	柔道Ⅰ	1通	2					○		1						
	柔道Ⅱ	2通	2					○		1						
小計 (8科目)	—	8	8	0	—			2	2	0	0	0		兼5		

教 育 課 程 等 の 概 要

(保健医療学部 整復医療学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎 柔道 整復学	運動器の解剖学	2前	2			○			1	1						
	整復外傷学総論Ⅰ(骨損傷)	1後	2			○			1							
	整復外傷学総論Ⅱ(関節損傷)	1後	2			○					1					
	整復外傷学総論Ⅲ(軟部組織損傷)	1後	2			○			1							
	運動器損傷治療学総論	2前	2			○				1						
	運動器損傷の評価法	2前		2		○				1						
	小計(6科目)	—	10	2	0	—			2	2	1	0	0	0		
	臨床 柔道 整復学	骨損傷Ⅰ(肩甲帯～上腕)	2前	2			○					1				
		骨損傷Ⅱ(前腕～手指)	3前	2			○			1						
		骨損傷Ⅲ(下肢と体幹)	3前	2			○				1					
		関節損傷Ⅰ(上肢)	2後	2			○			1						
		関節損傷Ⅱ(下肢と体幹)	3後	2			○				1					
		軟部組織損傷Ⅰ(上肢と体幹)	2後	2			○					1				
軟部組織損傷Ⅱ(下肢)		3前	2			○				1	1					
アスレティックリハビリテーション論		3前		2		○				1						
応用整復治療学演習Ⅰ		3前		2			○					1				
応用整復治療学演習Ⅱ		4前		2			○		1		1					
小計(10科目)	—	14	6	0	—			1	2	2	0	0	0			
柔道 整復 実技 (臨床 実習を 含む)	運動器損傷治療学実習Ⅰ(包帯法)	1通	2					○	1		1					
	運動器損傷の評価法実習	1通	2					○		1	1					
	運動器損傷治療学実習Ⅱ(後療法)	2通	2					○		1	1					
	整復治療学実習Ⅰ(肩甲帯～上腕)	2前	1					○	1		1					
	整復治療学実習Ⅱ(前腕～手指)	3前	1					○			2					
	整復治療学実習Ⅲ(頭・頸部、体幹)	3前	1					○	1	1						
	整復治療学実習Ⅳ(下肢)	3後	1					○		2						
	応用整復治療学実習Ⅰ	3後	1					○			2					
	応用整復治療学実習Ⅱ	4前	1					○		1	1					
	予防とコンディショニング	3後	1					○	1	1						
	アスレティックリハビリテーション	4前	1					○	1	1						
	臨床実習Ⅰ	3後	1					○	1	1	2				オムニバス	
	臨床実習Ⅱ	4前	1					○	1	1	2				オムニバス	
小計(13科目)	—	16	0	0	—			1	2	2	0	0	0			
総合	整復医療総合演習Ⅰ	4前	1					○	1	2	2				オムニバス	
	整復医療総合演習Ⅱ	4後	1					○	1	2	2				オムニバス	
	卒業研究	4通	2					○	5	3	2					
	小計(3科目)	—	4	0	0	—			5	3	2	0	0	0		
合計(85科目)			—	99	54	0	—		5	3	2	0	0	0	兼31	
学位又は称号		学士(保健医療学)		学位又は学科の分野				保健衛生学関係								
卒業要件及び履修方法								授業期間等								
学部共通科目から25単位以上 (必修8科目11単位、選択15科目27単位の中から14単位以上) 専門教育科目から104単位以上 (必修48科目88単位、選択14科目27単位の中から16単位以上) 合計129単位以上修得のこと (履修科目の登録の上限:42単位(年間))								1学年の学期区分			2学期					
								1学期の授業期間			15週					
								1時限の授業時間			90分					

教 育 課 程 等 の 概 要

(保健医療学部 救急医療学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学部 共通 科目	医療英語Ⅰ	1前	1				○		1		1				
	医療英語Ⅱ	1後	1				○		1		1				
	英語コミュニケーションⅠ	2前	1				○		1		1				
	英語コミュニケーションⅡ	2後	1				○		1		1				
	小計(4科目)	—	4	0	0	—			1	0	1	0	0	0	
	現代社会と憲法	1前		2		○									兼1
	変貌する社会と医療	2後		2		○									兼1
	こころと行動の科学	1前		2		○									兼1
	生命の科学	2前		2		○									兼1
	社会と人間生活	2前		2		○									兼1
	スポーツ人類学	1前		2		○			1						
	科学思想史	1前		2		○									兼1
	文学と人間	2前		2		○									兼1
	発育発達論	2前		2		○									兼1
	小計(9科目)	—	0	18	0	—			1	0	0	0	0	兼8	
	総合科目	日体大の歴史(日体伝統実習を含む)	1前	2			○			1					
		野外活動実習	1前	1					○		1				兼1
		小計(2科目)	—	3	0	0	—			1	1	0	0	0	兼1
	教理系・情報	数理科学	1前		2		○								兼1
		統計学	1後		2		○			1					
		情報機器の操作	2前	2			○								兼1
		小計(3科目)	—	2	4	0	—			1	0	0	0	0	兼2
	生物学系	基礎生物学	1前	2			○								兼1
		細胞生物学	1後		2		○								兼1
	小計(2科目)	—	2	2	0	—			0	0	0	0	0	兼2	
体育学系	アスレティックトレーニング(基礎)	1前		1				○		1	1	1		兼2	
	アスレティックトレーニング(応用)	2前		1				○		1	1	1		兼2	
	コンディショニング	3前		1				○		1	1	1		兼2	
	小計(3科目)	—	0	3	0	—			0	1	1	1	0	兼2	

教 育 課 程 等 の 概 要

(保健医療学部 救急医療学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎 医学系	医学概論	1前	2			○			3						兼2	オムニバス
	公衆衛生学Ⅰ	1前	2			○			1							
	公衆衛生学Ⅱ	1後		2		○			1							
	解剖学Ⅰ	1前	2			○									兼2	オムニバス
	解剖学Ⅱ (解剖見学実習を含む)	1後		2		○									兼2	オムニバス
	生理学Ⅰ	1前	2			○									兼2	
	生理学Ⅱ	1後		2		○									兼3	
	生化学	1前	2			○									兼1	
	病理学	1後	2			○									兼1	
	微生物学	1後	2			○									兼1	
	血液学	2前		2		○									兼1	
	免疫学	1後		2		○									兼1	
	薬理学	2前	2			○									兼1	
	救命救助法	1前	1					○	1		1					兼中・オムニバス
	小計 (14科目)		—	17	10		—		5		1	0	0		兼9	
専門 教育科目	内科学Ⅰ	2前	2			○			1							
	内科学Ⅱ	2前	2			○									兼1	
	内科学Ⅲ	2前	2			○									兼1	
	内科学Ⅳ	2後	2			○									兼1	
	内科学Ⅴ	2後	2			○									兼1	
	内科学Ⅵ	2後	2			○									兼1	
	医療コミュニケーション学	3前		2		○									兼1	
	医療安全論	4後		2		○			2							オムニバス
	救急医学概論	1前	2			○			1							
	救急処置総論	1後	2			○			1							
	救急処置各論	2前	2			○			1							
	災害医学	3前	2			○			1							
	外科学Ⅰ	3前	2			○			1							
	外科学Ⅱ	3後	2			○			1							
	外傷学	2前	2			○									兼1	
	環境障害・急性中毒学	2後	2			○									兼1	
	救急搬送論	3前		2		○			1		1					オムニバス
	小児科学	4前	2			○									兼1	
	産婦人科学	4前	2			○									兼2	オムニバス
	整形外科学	3前	2			○			1							
	脳外科学	3前	2			○			1							
	精神医学	4前	2			○									兼1	
	放射線概論	4前	2			○									兼1	
	シミュレーションⅠ	2前	2					○	1		1					オムニバス
	シミュレーションⅡ	2後	2					○			1					
	シミュレーションⅢ	3前	3					○	1		1					オムニバス
	シミュレーションⅣ	3後	3					○	1		1					オムニバス
シミュレーションⅤ	4前	2					○	1		1					オムニバス	
シミュレーションⅥ	4後	2					○	1		1					オムニバス	
病院内実習	3通	10					○	6	1	2					集中	
救急車同乗実習	3後	3					○	1		1					集中	
小計 (31科目)		—	67	6	0	—		6	1	2	0	0		兼10		

教 育 課 程 等 の 概 要

(保健医療学部 救急医療学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門 教育 科目	産業保健学	2前		2		○									兼1
	環境衛生工学	3前		2		○									兼1
	職業適性論	2後		2		○									兼1
	労働衛生法規Ⅰ	4前		2		○									兼1
	労働衛生法規Ⅱ	4後		2		○									兼1
	小計(5科目)	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0		兼3
	総 合	インターンシップ	4通		2				○	6	1	2			
	卒業研究	4通		2			○		6	1	1				
	小計(2科目)	—	0	4	0	—			6	1	2	0	0	0	
合計(75科目)		—	95	57	0	—			7	1	2	1	0		兼30
学位又は称号		学士(保健医療学)			学位又は学科の分野			保健衛生学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
学部共通科目から25単位以上 (必修8科目11単位、選択15科目27単位の中から14単位以上) 専門教育科目から104単位以上 (必修37科目84単位、選択15科目30単位の中から20単位以上) 「インターンシップ」か「卒業研究」のいずれかを選択 合計129単位以上修得のこと (履修科目の登録の上限:42単位(年間))							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部整復医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	言語 コミュニ ケーション 科目	医療英語 I	医学、医療に足を踏み入れるための基礎的知識のアプローチとなるよう、医療環境場面で使用される用語の意味やその定義およびその背景にある周辺医療情報や医学知識の基礎について、英語テキストや参考資料の読解を通して学修します。医療環境場面の初期対応に困ることのないような医療英語を身につけることを目標とします。英語を話す外国人の患者さんにも対応できるようになります。これはまた患者の立場として、みなさんが海外旅行先で急に病気になったり怪我をしてしまったときにも大いに役立ちます。授業内容に関する視聴覚教材も適宜使用します。	
		医療英語 II	医療英語Iで学修した基礎的知識をさらに発展させ、特に医療人として医療現場で出会う可能性の高い医学英語、診療記録で使用頻度の高い英語などに慣れておくことが重要です。医療に関する英語の単語は比較的長くて一見難しそうですが、単語の語源がわかれば大いにヒントになります。例えば、electrocardiogram ⇒ electr（電気の）＋o（結合形）＋cardi（心臓の）＋o（結合形）＋gram（記録）⇒「心電図」という具合です。また、英語で書かれた論文を読めるように、なお一層読解力の向上に努めます。	
		英語コミュニケーション I	本学修の目標は、「医療英語I」及び「医療英語II」において学修した医療英語の知識をもとにして、医療現場で外国人患者などとも必要最小限の英語による意思の疎通ができるようにすることである。英語による一般的な会話練習に加えて、医療現場の特殊性と医療に関する専門用語の知識が求められるので、「医療英語」の復習、さらなる発展的学修が必要である。これはまた患者の立場として、みなさんが海外旅行先で急に病気になったり怪我をしてしまったときにも大いに役立つはずである。授業では視聴覚教材も適宜有効に利用する。	
		英語コミュニケーション II	本学修の目標は、「英語コミュニケーションI」で学修した英語コミュニケーション力が安定した力となるように復習も怠りなく、さらなる発展を目指す。また、医療現場を想定した英語による口語表現の修得だけでなく、将来の保健医療関係学会での英語による発表や英語論文の作成力まで視野に入れた学修を進める。これはみなさんが日本国内のみならず、国際的に活躍するときに大きな力と自信になるはずである。授業では視聴覚教材も適宜有効に利用する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	教養 科目	現代社会と憲法	<p>憲法を意識して、日常生活を送っている人は少ない。一見、我々の生活とは関係ないと思われがちな憲法であるが、憲法の人権や統治に関する規定は、実は、さまざまな場面でかかわっている。すなわち、大学生生活、入社や解雇、報道のあり方、警察による捜査や逮捕、裁判員裁判、一票の格差等、身の回りの多くの出来事が、憲法と無関係ではない。とくに、将来医療従事者となる者は、インフォームド・コンセント、尊厳死などの終末期医療、宗教的輸血拒否等、重大な場面で憲法が関わってくる。</p> <p>本学修では、日本国民として知っているべき憲法の基本的な知識から、医療従事者として学んでおくべき論点まで、なるべく具体的な事例などをもとに学んでもらう。</p>
		変貌する社会と医療	<p>日本の医療制度は①医療保険制度と財政②医療期間やマンパワーという医療提供体制——の二本柱で成り立っている。その両分野を多角的にわかりやすく学修し、医療の全体像を把握することを目標とする。同時に医療制度は、高齢化の進展、財政難というわが国の現状を前に、様々な面で改革が迫られており、その課題、解決策についても政府が進めている政策も政府が進めている政策も踏まえながら詳しく見ていく。併せて、医療従事者として求められるコミュニケーション能力などの必須要件などに関しても解説し、身につけてもらうことを目標とする。</p>
		こころと行動の科学	<p>人「心理学は長い過去と短い歴史を持っている」というエビングハウスの有名な言葉がある。長い過去とは心や精神・魂の存在について、短い歴史とは科学としての心理学をさしている。本講では心理学の長い過去から現在までの概略と、人間行動の法則性について新しい知見を加味しながら授業を進めていく。人間の心や行動の不可思議さを手掛かりとして、改めて人間についての興味を深めてほしい。また、この授業が今後学ぶであろう精神保健、カウンセリング、臨床心理学などの応用領域の基礎としての位置づけとなれば幸いである。</p>
		生命の科学	<p>走る事も跳ぶ事も考える事も、病気も治療も全て生命活動の一部である。これらの全ては、驚くほど似た様な物質が驚くほど似た様な方法で制御される事によって遂行されている。これらの生命活動の仕組みを学ぶ。単に花の名前や臓器の形と名前を覚えるだけではなく、生命の仕組みを学んでほしい。生物科学は、ここ数十年で飛躍的な発展を遂げ、「遺伝子組み換え食品」や「遺伝子治療」、「iPS細胞」など、20年前には存在すらしなかった言葉が一般的に用いられる様になった。生き物としての人間の仕組みを知るために、さらに最新の知識を理解し活用するために、必要な基礎知識を身につけてもらいたい。</p>

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	教養 科目	社会と人間生活	大きく変化する時代にあって、現実には遭遇すると思われる様々な事象、例えば、教育、医療、労働、社会・経済状況などを通じた諸課題について、社会的側面から多面的に捉え、社会と個人及び組織との関係性を考察し、課題解決に向けた取り組みを学修する。 具体的には、国の教育政策に大学がどう係るか、大学と地域活動との連携など大学を中心とした社会とのかかわり、さらには、若者と最近の労働環境の変化について、高齢社会の中での生き甲斐と健康生活の重要性など人間社会全体から捉えた具体的な取り組みを考察する。
		スポーツ人類学	現代社会においてスポーツは人々の生活と密接な関わりを持つようになった。こうした背景には、社会が成熟しただけでなく、スポーツそのものも多様化してきたことにある。本学修では、私たちにとって身近となったスポーツという現象を人類学的な文脈（文化的・社会的）の中で理解していくための視点や方法を身につけることを目標とする。そのために、これまで提出されてきた人類学の学説史をベースにしながら、スポーツという現象を読み解いていく。また、最新の人類学理論をスポーツ場面にいかに応用していくのかについても説明する。
		科学思想史	西欧古代以来の歴史において、「科学」の誕生と発展は哲学・思想の展開と深く関わっている。そしてまたこれらは産業・経済・社会の動態と密接に関連している。この授業では、ギリシャ古代以来の西欧における哲学・思想の歴史と科学の生育のダイナミクスを分析する。またこれらと比較して、日本の近代化と日本人の意識を検討し、現代の我々の課題を考察する。
		文学と人間	歴史および文化の状況下を見事に生き抜いた様々な人間像を活写する優れた古典的文学作品について、作品が生まれ享受されてきたく時代や社会の特質に注目しつつ多様な側面から分析し読み味わってみることをとおして、作品にこめられた「価値観」「恋愛観」「美意識」「死生観」などの諸相を浮き彫りにしていくことを目的とする。 文学作品や関連資料を、古典作品については現代語訳を提供しつつ、じっくりと読み解き、個性的で魅力的な作中群像と彼等が関わった恋愛や事件や合戦に想いを馳せていく。
		発育発達論	本講義では、発育発達や加齢に関わる身体の変化を中心に学んでいきます。具体的には、胚子期から老年期の身体の変化を形態的側面と機能的側面の大きく2つに分けてみていきます。 形態的側面では、骨格、歯牙の発育、身体組成や姿勢の変化、などを取り上げます。機能的側面では、筋の発達、神経系・感覚の発達、エネルギー代謝系・呼吸系の発達、循環器系・内分泌系の発達、運動能力の発達に分けて講義を行います。さらに、子どもの体力低下の問題、女性や障害者の運動能力の特徴、中高齢者の体力の特徴にも着目します。 本講義の目標は、発育発達や加齢に関わる身体の変化を理解することです。さらに、子どもの体力低下の問題、障害者や女性の体力の特徴にも着目し、特に環境要因が発育発達に及ぼす影響について理解を深めることです。

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目	総合科目	<p>日体大の歴史 (日体伝統実習を含む)</p> <p>日体大の歴史を紐解くことは、近代日本の体育及びスポーツの歴史を語ることに通ずると言われる。設置者である学校法人日本体育大学は、「国民体育」の振興を目指して明治24（1891）年8月に創設され、以後時代のニーズに積極的応えてきた。本講義では、日本のスポーツ界を支えてきた日本体育大学の歴史を振り返ることによって、日体大が果たしてきた役割（社会的使命）について再確認するとともに、医療分野でも社会貢献できる体育、知育、徳育に優れた医療人を育成するための将来を見据えた日体大の学生としてのアイデンティティを醸成しようとするものである。</p>	
	野外活動実習	<p>本実習は、野外での自然体験と野外スポーツを通して、自然環境の偉大さ、危険性の理解を深めたうえで、それを安全に活用できること、さらに環境問題を意識した能力や態度を養う。また、集団生活を通して、仲間とのコミュニケーションを図り、自主性、協調性、社会性を身につける体育関連指導者、アスリート、医療人として社会貢献できる人材の育成を行うことを目的としている。その内容は、水の事故から身を守るウォーターセーフティーやスノーケリング等である。また、陸上での事故から身を守る救急法やキャンプ等である。</p> <p>キャンプ設営、自然環境観察、救急法講習、スノーケリングプール講習、スノーケリング海洋実習、ウォーターセーフティー講習等を3泊4日で実習する。 (22 黄仁官/25 小泉和史 共同で担当)</p>	共同
	数理・情報系	<p>数理科学</p> <p>自然現象や日常生活の様々な事象が数学を用いて解析される。この科目では、数学を単なる技術学習としてではなく、日常と結びつけた論理学習として、種々の事象例の解析を学修する。微分や積分がどのような問題の理解に役立つか、身近な物理学の素材などにも触れる。微分とは何か、初等関数の微分、速度、加速度、地震の強度、等速円運動、三角関数の微分などについて学修し、積分とは何か、面積・体積を求める、仕事、力の積分などから積分について学修する。更に、製造業における最適発注量の算定、借金の返済など日常生活と数学のかかわりについても考察する。</p>	
	統計学	<p>統計学とは、ある集団の調査資料や測定データを基に、その集団の傾向・性質等を数値として算出し評価・解釈を行う上での根拠を提供する学問である。本学修では、医療分野で用いられている統計学に関して、演習形式を取り入れ、実際に測定データの収集から、統計処理及びその評価まで実践・学修する。</p> <p>具体的には、基本データの度数分布、グラフ作成と演習、平均値、中央値の算出、分散と標準偏差、標準誤差、正規分布などについて学修。2つのデータの関係について、相関関係、散布図、回帰方程式の算出、図表の作成、統計処理などについて学修、まとめとして統計の課題と将来の展望について学修する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目	数理・情報系	<p>1. 授業用情報システム、2. MUA、エディタ、表計算のソフトウェア、3. デジタルファイルの複製や管理について理解することによって保健医療等の現場でPCを活用できるようになるための素養を身につけることをめざして授業を行う。また医療関連で多く用いられる画像データの取り扱いについても学修する。</p> <p>具体的には、ネットワークセキュリティとMUAに関する演習、MUAと添付ファイルの課題演習、タッチタイプと文書作成、ファイルシステムと課題作成のためのファイル管理、デジタル周辺機器の活用とデータ整理、デジタル画像の課題演習、情報検索と課題の演習などについて学修する。</p>	
	生物学系	<p>基礎生物学</p> <p>医学の理解に必要な生物学の基礎について学ぶ。高校で学んできた生物学の知識を基に、より専門的な内容を扱いながら人体のしくみについて理解を深めていく。合わせて、種々の病態や疾患の理解に必要な、医学的用語や関連知識についてもおさえる。(1)すべての生物は細胞からできている（細胞が生命の単位になっている）こと、(2) 遺伝と遺伝子発現について理解すること、(3)医学的トピックを理解するのに必要な基礎知識を身につけることを目標とする。</p>	
	生物学系	<p>細胞生物学</p> <p>ヒトの体は細胞から成り立っています。iPS細胞が医学分野で非常に重要視されており細胞を基盤とした再生医療が次世代医療の中核をなすとみなされている現代において、細胞生物学の理解が医療従事者にとって必須であることを物語っているといえます。本学修では細胞と遺伝情報の関わり、細胞内小器官とその機能、細胞を形作る細胞骨格、細胞内代謝およびエネルギー合成などをまず概観します。次に細胞分裂、シグナル伝達、発生と分化などを学修することで多細胞系の理解を目指します。最終的に細胞を基礎とした個体の生理学的理解の学修を目指したいと思います。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	体育 学系	<p>アスレティックトレーナーの学問的・職業的領域であるアスレティックトレーニングについて概説する。アスレティックトレーナーの役割を1. スポーツ外傷・障害の予防、2. スポーツ現場における救急処置、3. アスレティックリハビリテーション、4. コンディショニング、5. 検査・測定と評価、6. 健康管理と組織運営、7. 教育的指導の7項目から学修しアスレティックトレーナーとしての基本的な姿勢を理解することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(21 黄仁官/2回) アスレティックトレーナーの役割・任務・業務についてチーム競技・個人競技に分けて学修する。 また、ドクター、理学療法士など医学スタッフ、バイオメカニストなど科学スタッフ及びコーチとの連携・協力について学修する。</p> <p>(26 河野徳良/7回) アスレティックトレーナーとは何なのか免許・資格など国内・国外の現状について学修する。 また、アスレティックトレーナーの役割として最も重要であるスポーツ外傷・障害の予防について、それらの発生メカニズム、スポーツ現場における救急処置（外傷・障害の評価と手順）について、スポーツ現場における救急処置（RICE処置、心肺蘇生法など）について学修する。 さらに、競技復帰を目的とするリハビリテーションであるアスレティックリハビリテーション競技スポーツにおいて勝つための全ての準備であるコンディショニングについてアスレティックトレーナーの立場から学修する。*実技含む</p> <p>(27 志村広子/1回) アスリートの健康管理及びアスレティックトレーニングにおける組織運営についてアスレティックトレーナーの立場から学修する。</p> <p>(28 櫻井規子/4回) 検査・測定と評価（姿勢・身体アライメント・筋委縮）、検査・測定と評価（関節弛緩性・筋タイトネス）について学修する。*実技含む また、検査・測定と評価（関節可動域）、検査・測定と評価（徒手筋力検査・筋力・筋パワー・筋持久力）についても学修する。</p> <p>(30 村田由香里/1回) アスリートや学生トレーナーなどに対する教育的指導について学修する。 また、国際コーチ連盟の定めるコーチの倫理規定をもとに、倫理的な問題について学修する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	体育 学系	<p>アスレティックトレーニング論（基礎）で学修した内容を基礎とし、アスレティックトレーナーの役割として最も重要な外傷・障害の予防について学修する。前半では歩行、走運動、ストップ、方向転換、跳躍動作、投動作など基本的なスポーツ動作の観察と分析から外傷発生機転メカニズムを学ぶ。後半では冬季種目、記録系種目、球技種目、ラケット種目、採点種目、格技系種目など各種目の競技特性を理解し競技特有の外傷・障害を知り、予防法を見出しさまざまなスポーツ現場に対応できる能力を身につけることを目標とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（21 黄仁官／1回） 陸上競技における競技特性と外傷・障害予防について学修する。スポーツ復帰のための機能的・体力的到達目標について講義する。*実技含む</p> <p>（26 河野徳良／8回） 歩行、走運動の観察・分析と外傷発生機転メカニズム、ストップ、方向転換、跳躍動作の観察/分析と外傷発生機転メカニズム、投動作の観察/分析と外傷発生機転メカニズムについて学修する。*実技含む また、種目特性と外傷・障害予防としてラグビー、アメリカンフットボールなどのタックル時のあたり動作の観察/分析と外傷発生機転メカニズムについて、バスケットボール、ハンドボール、野球、ソフトボールにおける競技特性と外傷・障害予防について、柔道、レスリングにおける競技特性と外傷・障害予防について学修する。</p> <p>（27 志村広子／1回） 水泳競技における競技特性と外傷・障害予防について学修する。スポーツ復帰のための機能的・体力的到達目標について講義する。</p> <p>（28 櫻井規子／4回） スポーツ/フィギュアスケートなどの氷上種目、スキーなど雪上種目における競技特性と外傷・障害予防について学修する。 また、ラケット種目のテニス、バドミントンにおける競技特性と外傷・障害予防についても学修する。</p> <p>（30 村田由香里／1回） 採点種目である、体操（新体操等）における競技特性と外傷・障害予防について学修する。 スポーツ復帰のための機能的・体力的到達目標について講義する。 *実技を含む</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目	体育学系 コンディショニング	<p>アスリートが目標とする試合で成功するためには、日々刻々と変化するコンディションを計画的に調整しコンディショニングを行うことが重要である。アスレティックトレーナーはアスリートのコンディションを調整するスペシャリストの役割を担わなければならない。コンディショニングの維持、向上させる手段としてマッサージ、ストレッチング、時にはテーピング等を行うことは有用であり、ここではこれらの手段を用いてコンディションの調整法を学修することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(21 黄仁官/2回) コンディショニングの意義と必要性について学修する。 また、コンディションを把握するための指標としてダイナミック/スタティックアライメント、関節柔軟性、筋柔軟性について学修する。 *実技含む</p> <p>(26 河野徳良/8回) マッサージ及びストレッチング：マッサージの手技、目的、効果及びストレッチングの種類、効果について学修する。 特に、下肢（大腿部）、腰部、上肢（前腕・手）におけるマッサージ及びストレッチングの方法と効果について学修する。 テーピング：足関節、膝関節・股関節、体幹、肩関節・肘関節・手関節のテーピングについて学修する。</p> <p>(27 志村広子/1回) 下肢（足部・下腿部）におけるマッサージ及びストレッチングの方法と効果について学修する。その部位のスポーツ外傷・障害の予防と疲労回復について、具体的に解説する。</p> <p>(28 櫻井規子/4回) 背部、頸部、胸部、腹部、上肢（肩・上腕）におけるマッサージ及びストレッチングの方法と効果について学修する。その部位のスポーツ外傷・障害の予防と疲労回復について、具体的に解説する。</p>	オムニバス方式
専門 教育科目	健康科学 栄養学 (スポーツ栄養学を含む)	<p>心身の健康の保持・増進、疾病の予防のため、ヒトが必要とするエネルギー、栄養素の代謝とその生理学的な基礎知識について学修する。さらに応用として、スポーツ活動時におけるコンディショニング調整やさまざまな目的を達成するための栄養の意義と具体的な栄養摂取法についても学修する。</p> <p>本講義では、栄養の意義、健康の維持における栄養の役割、ライフステージに応じた適切な食事、スポーツと栄養に関する基礎的な知識を修得し説明できることを目標とする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部整復医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	健 康 科 学	発育発達論	<p>本講義では、発育発達や加齢に関わる身体の変化を中心に学んでいきます。具体的には、胚子期から老年期の身体の変化を形態的側面と機能的側面の大きく2つに分けてみていきます。</p> <p>形態的側面では、骨格、歯牙の発育、身体組成や姿勢の変化、などを取り上げます。機能的側面では、筋の発達、神経系・感覚の発達、エネルギー代謝系・呼吸系の発達、循環器系・内分泌系の発達、運動能力の発達に分けて講義を行います。さらに、子どもの体力低下の問題、女性や障害者の運動能力の特徴、中高齢者の体力の特徴にも着目します。</p> <p>本講義の目標は、発育発達や加齢に関わる身体の変化を理解することです。さらに、子どもの体力低下の問題、障害者や女性の体力の特徴にも着目し、特に環境要因が発育発達に及ぼす影響について理解を深めることです。</p>	
		加齢学	<p>筋骨関節系の加齢性変化を理解し、それから生じる運動器疾患の概要と各論を学修する。科目の概要と加齢性の変化、筋の変化、骨の加齢性変化、軟骨の加齢性変化、靭帯、腱の加齢性変化、変形性脊椎症、変形性関節症、骨粗鬆症についても学修する。</p> <p>また、加齢に伴う心身の変化について、生活歴、社会環境との関連について考察する。高齢者で発生しやすい循環系疾患などの病態生理、予防法、リハビリ方法等生活習慣病の予防とケア、メタボリックシンドロームの予防とケア、脂肪細胞とアディポサイトカインのかかわり、活性酸素と酸化ストレスにかかわる疾患とそのケア、Sirtuin 長寿関連遺伝子を活性化する要因について、加齢に伴う体力の変化、サルコペニアについて、iPS 細胞の基礎と臨床応用についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(19 大野誠/7回) 生活習慣病の予防とケア、メタボリックシンドロームの予防とケア、脂肪細胞とアディポサイトカインのかかわり、活性酸素と酸化ストレスにかかわる疾患とそのケア、Sirtuin 長寿関連遺伝子を活性化する要因について、加齢に伴う体力の変化、サルコペニアについて、iPS 細胞の基礎と臨床応用について学修する。</p> <p>(31 植松光俊/8回) 科目の概要と加齢性の変化、筋の変化、骨の加齢性変化、軟骨の加齢性変化、靭帯、腱の加齢性変化、変形性脊椎症、変形性関節症、骨粗鬆症についても学修する。</p>	オムニバス方式
		生化学	<p>ほぼ全ての生理学的反応は生化学的反応の積み重ねによって達成されているため、医療の分野において生化学は全ての学問の基礎になるといえます。本講義では生体を構成する生体高分子であるタンパク質、脂質、糖質、核酸などの化学的構造を学修します。さらに生化学反応の主体ともいえる酵素の特徴を概観し、酵素によって触媒される主要な生体高分子の代謝および生合成反応に言及します。加えて細胞内外における情報伝達物質とその作用機序を解説します。最終的に医療従事者にとって基本となりうる生化学的基礎的知識を得ることを本講義の目標とします。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	人間の構造と機能	<p>解剖学は人体の正常な形態と構造について学ぶもので、医療系学生にとって基礎医学の中でも最重要科目のひとつである。整復アスレティック学を学修する上で、特に重要な運動器と神経との関連および脈管系について学修をする。体幹、脊柱を構成する骨格と筋、神経との関係、上肢の骨に付着する筋の起始・停止、肩・肘・手関節に関連する筋・靭帯、神経支配との関連、下肢の骨格と付着する筋および神経との関連、股関節、膝関節、足関節と靭帯、筋、神経の関係とこれら諸器官に栄養を与える脈管系について詳細な学修を行う。最後に人体解剖体の見学実習を通して、人体の三次元構造についての理解を深めるための学修を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(25 小林正利/25回) 体幹の柱となる脊柱と上肢帯および下肢帯を介して結ばれる骨格系と、これら骨格系から起始・停止する筋系とこれら運動器の機能に直結する神経系について講義し、最後に人体解剖見学実習を通して人体の複雑な三次元構造について理解が深まるよう講義・指導する。</p> <p>(33 唐沢延幸/5回) 人体のあらゆる器官、細胞に酸素・栄養を供給、代謝によって生じた老廃物を運び出す血管系、および免疫に関係するリンパ系について講義、最後に人体解剖見学実習を通して心臓一血管系の全体像の理解を深めるべく指導する。</p>	オムニバス方式
		<p>解剖学は人体の正常な形態と構造について学ぶもので、医療系学生にとって、基礎医学の中でも最重要科目のひとつである。解剖学Iでは骨学、筋学などの運動器と神経、脈管の関係について詳細に学修してきたが、解剖学IIでは生命維持諸器官である消化器系（食道～肛門までの消化管、肝臓、膵臓などの消化腺）、気管、肺などの呼吸器系、腎臓、膀胱などの泌尿器系、男性・女性生殖器系、眼・耳・皮膚などの感覚器系、下垂体、甲状腺、副腎などホルモン分泌器官である内分泌系と発生学について学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(25 小林正利/11回) 生命維持の基となる食物摂取、栄養吸収と不要物排泄に係る消化器系、酸素を取り込み炭酸ガスを排出する呼吸器系、代謝によって生じた不要液性成分の排出に係る泌尿器系、生物の種の保存に係る男女生殖器系、ホルモン分泌器官系と個体発生学について講義する。</p> <p>(33 唐沢延幸/4回) 視覚器（眼球）、平衡聴覚器（耳）および皮膚とその付属腺などについて講義する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部整復医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	人間の構造と機能	生理学 I	人の生命現象は、分子、細胞、器官、個体の各レベルにおいて、精巧なメカニズムによって統御と協調を保ちつつ営まれる。生理学はこの生命現象を物理化学的基礎と方法に基づいて機能的側面から究明する学問であるので、生理学 I では主に植物性機能について広い観点から生物に共通する現象や法則性を述べる。さらに医療人の育成が主目的であるから人体生理学を解説する。具体的には、血液系、循環器系、呼吸器系、消化器系、栄養と代謝、体温調節、腎体液、内分泌系、生殖器系、骨と筋肉の基本的知識を理解させる。	
		生理学 II	人の生命現象は、分子、細胞、器官、個体の各レベルにおいて、精巧なメカニズムによって統御と協調を保ちつつ営まれる。生理学はこの生命現象を物理化学的基礎と方法に基づいて機能的側面から究明する学問であるので、生理学 II では動物性機能について広い観点から生物に共通する現象や法則性を述べる。さらに医療人の育成が主目的であるから人体生理学を解説する。具体的には、神経の基本的機能、神経反射、体性神経系、自律神経系、姿勢と運動の調節、高次神経機能、感覚の一般的性質、体性感覚、内臓感覚、嗅覚、味覚、聴覚、視覚、前庭感覚の基本的知識を理解させる。	
		運動学	生理学及び解剖学と関連づけて運動時のエネルギー代謝・骨格筋系・神経系・呼吸循環系などの機能を学び、人間の身体運動や動作の複雑さを科学的に分析し、身体活動のための力学の原理（四肢・体幹の運動、姿勢、歩行など）や運動制御及び運動異常の基礎理論を学修する。 具体的には、運動と感覚（身体の反射や姿勢制御の脳波などに関する基礎理論の学修）、運動と抹消神経（神経、筋活動分布、運動調節能力など）、運動と筋（筋肥大、筋委縮、加齢との関連）、運動と骨格（骨の形成と吸収、運動と骨強化）、運動と代謝（タンパク質の異化・同化、脂質・糖代謝）、運動と呼吸（換気調節、酸素供給と消費）、運動と循環（血圧など循環調節）、運動と体温・血液・ホルモン、運動と免疫などについて学修する。	
		運動学実習	運動学の講義で学修した身体運動科学理論を実践的に再学修することを通じて、より深く運動学を理解し、身につける。特に、身体活動レベルを発育・発達を柱とし、環境や目的別に観察する上で様々な測定や分析装置を用いて関節運動、姿勢、筋力、反応、呼吸・循環系などの測定・分析・評価について学修する。 具体的には、生体観察（体表区分、身体計測点、身体運動の面と軸、立位姿勢アライメント、体重心など）生体力学（関節運動における重力と筋張力）、筋力（関節角度と最大筋力、筋持久力の測定）、運動学的分析（歩行テスト、スクワットや立ち上がり動作の実践と分析）、筋電図、運動負荷の基礎、実践、評価（身体作業能力、生理的コスト指数、主観的運動負荷の基本学習、測定データに関する分析と評価）などについて学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部整復医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	疾病と傷害	病理学総論	病理学とは病気（疾病）の原因・経過及び結果を追求し、疾病に於ける機能と形態的变化を明らかにする事によって、病疾の本態を究明する学問で、基礎から臨床そして予防医学までの広い分野に關与する総合医学である。科学的根拠に基づいた正しい看護を行うには、疾病の原因、発症のメカニズム或いは治療の有効性を学習することが重要である。病理学を学習する事により正確な専門用語が会得出来、各種疾病の本態を専門的分野から学習し、医療人の一員として活躍できる能力を養いたい。	
		病理学各論	病理総論に於いて学習した知識を基盤に各諸臓器の主なる疾患について系統的に、即ち、循環器、呼吸器、造血・リンパ組織、消火器、内分泌器、脳・神経、泌尿器、男・女生殖器、運動器、皮膚に関して解説する。実務の際当該疾患に關与した場合、実力を発揮し、目的に適う看護が施行出来る事を目標に学習する。 循環器系（心臓、血管疾患）、呼吸器系（上気道、肺、縦隔の疾患）、消化器系（食道、胃、小・大腸、肝臓、膵臓、胆嚢・胆道の疾患）、泌尿器系（腎臓、膀胱、尿道疾患）、内分泌系（下垂体、甲状腺、副腎の疾患）、子宮、卵巣、乳腺、前立腺、精巣など男女生殖器系疾患、神経系疾患、膵臓・リンパ系などの造血器疾患、骨／軟部、筋疾患、皮膚疾患などの各論について学修する。	
		一般臨床医学	一般臨床医学で扱う分野は、実際の疾患の診断と治療に関するすべてであり、範囲は広大である。また、日常的常識の範囲から、なお学会で議論の余地がある最新の知見まで、その奥行きも千差万別といえよう。限られた時間内で、それらを習得するためには、まず総論として、診断、検査の進め方を学習する。その上で、各疾患に特徴的な事柄を、とくに内科学の各分野を中心に概説する。症候から診断、治療への流れは、どの分野であれ、医療人にとって必要不可欠な知識である。	
		神経内科学	医療従事者として、現場で遭遇する対象者の臨床神経学的症候を適切に掌握し、その背景にある病態・機序の知識をもとに実態を正確に理解し、専門職として課せられた対応が適切に行える能力を獲得することが学修の目的である。整復アスティック学を学修する上で、特に重要な神経系の構造と機能、神経学的診断と評価、神経症候群と神経学検査法について学修する。また認知症、脳血管疾患、脳変性疾患、錐体外路疾患、末梢神経障害、筋疾患、感染性疾患など神経内科の代表疾患について詳細な学修を行う。	
		外科学概論	外科学の基礎を身につけることを主目的とする。ここでは、その基盤となる外科学概論を学ぶ。損傷（創傷、熱傷）、外傷（交通外傷、頭部外傷など）、炎症（局所的变化と全身的变化、外科的感染症）、腫瘍（成因、分類、前癌病変、症状、診断・検査、治療）、ショック（分類、症状、診断、治療）、輸血と輸液、滅菌と消毒、各種手術法、麻酔（麻酔前投与、全身麻酔と局所麻酔）、移植と免疫、出血と止血、蘇生術について学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部整復医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	疾病 と 傷 害	精神医学	<p>小児期から老年期までに発症する各種の精神疾患について学修する。精神疾患の成因とその分類、電気生理的検査、画像解析などによる診断と評価、統合失調症、気分障害などの内因性精神障害、神経症性障害、成人の人格・行動・性の生涯などの心因性精神障害、脳気質性精神障害、中毒性精神障害、症状性精神障害、てんかんなどの外因性精神障害、精神遅延や心理的発達の障害などの発達障害、治療とリハビリテーションなどについて具体的に学修する。</p>	
		救急医学	<p>柔道整復士として備えるべき救急疾患、病態の把握に必要な基本的知識、適切な対処法を身に付ける。 ショックなどに適切に対処し、また意識障害の重症度判定、一般外傷の適切な初期治療、骨折の適切な固定法や搬送方法、救急蘇生法などを学修する。 救急医療のなりたち、現状と課題についてまず概説する。次いで、病院前救護体制（傷病発生現場での処置、救急車要請など）、救急救命処置に関する総論、全身・局所所見の把握、救急蘇生法（心肺蘇生法、気道確保、人工呼吸、胸骨圧迫リズムなど）、ショックへの対処法（出血性ショック、内因性ショック、ショックに伴う臓器障害と合併症）、骨折・脱臼の救急（診断と整復の全般について）、頭頸部外傷（固定、搬送上の課題、後遺症への対処法など）、脊髄損傷の病態、治療、リハビリテーションなどについて学修する。</p>	
		整形外科学	<p>救急救命士が身につけておくべき、整形外科学の基礎知識と臨床現場に求められる応用知識と技法、急処置の知識と実践法、観察の方法と意義（重症度、全身・局所の観察、各種病状の観察）、検査（各種病態に関する検査）等について学ぶ。 整形外科学の歴史と概要について学修した後、運動器の臨床解剖（脊椎、上肢、下肢：臨床現場で必要な基礎的解剖知識）、整形外科的治療法（基本的診察の手順と方法）、臨床検査法（整形外科的診断に必要な検査の種類、方法と内容）、治療法（整形外科的治療の種類、方法と内容）、骨・関節損傷（骨・関節の主要な損傷の診断と治療法）、脊柱・脊髄疾患、神経・筋疾患、骨・軟骨腫瘍、整形外科リハビリテーションの種類、適応、方法と内容などについて学修する。</p>	
		スポーツ整形外科学	<p>整復学と関連するスポーツによる運動器の外傷・障害について学ぶ。運動器解剖学を学びながら、投球肩障害、テニス肘などの肘関節疾患、手関節疾患、椎間板ヘルニアなどの体幹の疾患、股関節・膝関節・足関節などの主な外傷・障害について学修、さらにスポーツ外傷の治療の基礎知識などについて重点的に学修する。 スポーツ整形外科学の歴史、スポーツ外傷の疫学について概説する。その後、脳震盪、急性硬膜下血腫などの頭部外傷、頸椎外傷（予防、救急対応、搬送法）、疲労骨折（病因、治療、予防法）、肩・肘・手関節の障害（脱臼、テニス肘など）、膝関節の外傷・障害（十字靭帯、半月板損傷など）、大腿・下腿の外傷・障害（四頭筋肉離れ、アキレス腱断裂など）、骨盤・股関節の外傷・障害などについて学修する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部整復医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	疾 病 と 傷 害	リハビリテーション I	<p>リハビリテーションを通じて、一人ひとりが社会復帰を実現するためには、多職種連携による総合的なアプローチが必要であり、関連職種の専門性に対する理解を深めなければならない。また、臨床各科に共通する各種障害のとらえ方を具体的に理解し、医療従事者として活動する際に必要なリハビリテーション医学の知識と基本的技法を学ぶ。</p> <p>リハビリテーション医学の歴史と理念について概説する。次いで、リハビリテーションに必要な運動生理学の基本、機能障害の評価（ROM、筋力検査、運動機能検査など）、ADL評価（ADLとは、評価法）、QOL（QOLとは、評価法）、理学療法・作業療法（方法と内容、具体的プログラムなど）、義肢装具療法、言語聴覚療法、脳血管のリハビリテーション、呼吸・循環器のリハビリテーションなどについて学修する。</p>	
		リハビリテーション II	<p>スポーツによる代表的なスポーツ損傷と競技復帰までのアスレティック・リハビリテーションについて概説する。スポーツ損傷（整形外科）学、リハビリテーション学の知識を得るとともに代表的なスポーツ損傷の治癒過程と方法論を学修する。</p> <p>リハビリテーションの概要として、リハビリテーションの手技、方法の概要、物理療法、運動療法、関節可動域計測と徒手筋力テストについて学修。各部位の損傷と評価（頸部、腰部、骨盤のスポーツ損傷と評価、上肢・下肢のスポーツ損傷と評価）と各部位のリハビリテーション（上肢・下肢のスポーツ損傷のリハビリテーション）について学修する。</p>	
		医用画像読影学	<p>医用画像読影では正常解剖を熟知していることと同時に各種モダリティにおける正常解剖画像と異常疾患画像の識別する能力が求められている。本講義では、脳・脊髄や骨・関節領域を中心とする正常画像解剖と代表的な疾患の画像読影に必要な知識を修得することを目標としている。また救命救急医学に必要な脳や胸部、腹部、骨盤部における正常画像解剖と代表的な疾患の画像読影についても講義する。画像モダリティは単純X線撮影、X線コンピュータ断層撮影（X-CT）、X線血管造影検査（Angiography）、磁気共鳴画像法（MRI）、超音波断層検査（US）などである。</p>	
	保 健 医 療 の 福 祉 と 柔 道 整 復	関係法規	<p>法の意義、日本国憲法を中心とした法体系を理解して、柔道整復師として遵守すべき基本的法律である柔道整復師法を中心に、柔道整復師法施行令、柔道整復師法施行規則について学ぶ。また、医師法、医療法、歯科医師法、薬剤師法、保健師助産師看護師法、診療放射線技師法など他の医療関係法規についても、医療人として当然知らなければならない事項及び柔道整復師の行う保険請求業務について学修する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	保健 医療 福祉 と 柔道 整復 の 理念	<p>医学・医療の歴史的推移を概観した後、健康とは何か、医療の本質、医学・医療は誰のものか、医の倫理、生命倫理、患者の人権、死生観、サイエンスとしての医療とアートとしての医療、医の心、医療従事者に求められるもの、患者とのコミュニケーション、インフォームド・コンセント、医師法・医療法、ターミナル・ケア、安楽死、日本の医療システム、ヘルスプロモーション、医療事故と医療裁判、医療と科学技術等、医療に関わる様々な現代的課題から医療の本質を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 平沼憲治/4回) 西洋医学史：ヒポクラテスにはじまり、ギリシャ医学—中世の医学、疫病の時代、近代医学への道について講義する。 東洋医学史：中国を中心とした医学、特に漢方、針治療（麻酔）について西洋医学と対比させ講義する。 日本医学史：江戸時代、長崎出島のオランダ医学、シーボルト、緒方洪庵、杉田玄白「解体新書」にはじまり、日本医学が近代化していく歴史について講義する。</p> <p>(5 川上順子/3回) 医師法・医療法：医療従事者に必要な基本的法律知識と法的対応について講義する。 医療事故・医療裁判：実際の事故、判例から医学・医療の現場の課題について講義する。 ヘルスプロモーション：WH01986年オタワ憲章に基づいて、健康増進・疾病予防のための教育方法等について講義する。</p> <p>(11 武藤芳照/2回) 健康とは：WH0による健康の定義に基づき、健康の捉え方、健康の概念の変遷について講義する。 医療とは：医療は誰のものか、医療の本質のあり方について講義する。</p> <p>(12 朝日茂樹/3回) 医の倫理（1）：ヒポクラテスの誓い、ヘルシンキ宣言等にはじまり、生命倫理学について講義する。 医の倫理（2）：ターミナルケア、安楽死等、医療をめぐるさまざまな倫理問題について講義する。 医の倫理（3）：インフォームド・コンセントの目標、前提について講義する。</p> <p>(20 成田和穂/3回) サイエンスとアートとしての医療：医療の科学的側面と技術的側面について講義する。 医の心：医療従事者が身につけておくべき心構え、基本姿勢について講義する。 医療従事者と患者とのコミュニケーション：診察、検査、治療、リハビリテーションの場面でのコミュニケーションの方法と内容について講義する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	保 健 医 療 福 祉 と 柔 道 整 復 の 理 念	医療危機管理	近年、医療現場での適切な危機管理が求められている。それぞれの現場での危機事象に関する疫学から、危機事象の類型化を図ると共に、危機の回避、危機の低減、危機の移転、危機の保有等の対応を行わなければならない。 具体的な危機事象、並びに人為的エラーや有害事象に即した危機管理体制の構築、安全教育の方法と内容、発生時の現場での対応、報告書の記録方法等について学ぶ。
		衛生学・公衆衛生学	衛生学・公衆衛生学の目的は、人々の疾病を予防し、健康の保持・増進をはかり延命をもたらすことである。したがって、人々の健康を守り高める努力は、社会の中の個人と社会の組織的活動によるものが一体となって進められる。そこで公衆衛生学では、個人と社会組織を併せた健康づくりの基礎的知識について理解を深める。主な内容として、①健康の概念、WHOについて、②感染症の予防（消毒も含む）、③疾病予防と健康管理、④環境衛生、⑤産業保健、などである。
		障害者保健学	「障害者」の障害には、「疾病、疾患」とは異なった概念があり、障害の結果もたらされた状態（非可逆性）を持つ人と捉えられる。障害者は、幼児から老年まで、多種多様な障害が認定されているが、それぞれの障害に対応したリハビリからスポーツまで、健常者に近い生活の質の向上を目指す取り組みが行われている。この講義では、これらの多くの科学的な取り組みについて学修する。
		高齢者保健学	現代日本は、急激な高齢化社会となり、高齢者の健康、体力維持がクローズアップされている。さらに高齢者の医療費の増大とともに、老人病対策も急務である。こうした社会のニーズに対応して、高齢者の健康・体力の保持、増進に関して、科学的視点から学修をすすめる。老年期特有の障害を持つ高齢者に対して、どのように患者を理解し、治療するかを体験的に学修する。障害の種類や程度、家族や環境の状況、心理的状態などに配慮した態度、評価、目標設定、治療、リスク管理等を学ぶ。また心不全や慢性肺疾患等による高齢の長期臥床者に対する理学療法評価・治療計画・治療・リスク管理・記録について学ぶ。
		柔道 I	柔道の創設者である嘉納治五郎師範の生い立ちや「精力善用」「自他共栄」の柔道理論を理解する。柔道と柔道整復師との歴史的関わりについても学び、医療人として人間形成を養っていく。また、柔道の礼儀作法を修得し、社会に貢献できる人間力を身につける。柔道実技の基本動作の学修、健康維持、体力向上を目標とする。

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
保健医療福祉と 柔道 専門教育科目	柔道Ⅱ	柔道実技の修得を目指し講義を展開していき、立技では、崩し、作り、掛けの理論を实践で学び、寝技においては抑込技を中心に絞技、関節技の高い技術も修得する。柔道に必要な体捌き、動きの応用動作を身につけ、乱取り練習や試合が出来るようになることを目指す。また、審判規定を学び柔道の幅広い知識を修得し、初段レベルを目指し修学する。	
	運動器の解剖学	運動器とは、身体運動に関わる骨、筋肉、神経、靭帯などの総称である。運動器の種々の外傷や障害を理解するため、正常な運動器の形態と機能および外傷や疾患との関連について学修する。 【科目特有の知識・技術についての到達目標】 運動器の種々の名称、部位、形態、機能について正確に述べることができる。 【汎用能力としての学士力についての到達目標】 1. 正常な姿勢や個々の関節運動および全身運動、スポーツ動作などにおける運動器の機能を説明できる。 2. 各部位における代表的な運動器の外傷や疾患を説明できる。	
	整復外傷学総論Ⅰ (骨損傷)	本講義では柔道整復師にとって必要な骨の知識及び骨折学の総論について学ぶ。講義の到達目標は国家試験合格基準の知識の修得であるが、2年次以降の各論にスムーズに移行できるよう、臨床的な意義も含めて講義を進めていく。骨の知識については一般的な骨構造だけでなく、関節学、靭帯学を含めた運動器系の解剖も必要に応じて講義する。また、骨折総論では主に定義、分類、症状、合併症、治療法の順に講義を進め、骨折治療の専門家にとって必要な知識の修得を目指す。	
	整復外傷学総論Ⅱ (関節損傷)	本講義では、脱臼および関節構成組織の損傷、軟部組織の損傷について講義する。柔道整復師にとって脱臼の整復は必須の事項であり、その発生機序や特徴、整復法を十分理解する必要がある。一方、骨と骨の連結部である関節は関節包、靭帯をはじめ、様々な組織で構成され、その機能を発揮している。わずか一箇所の損傷（故障）であっても全身のパフォーマンス低下につながるため、しっかりと理解を深めてもらいたい。	
	整復外傷学総論Ⅲ (軟部組織損傷)	軟部組織は骨（硬組織）を除く結合組織と定義されます。結合組織を形作る実体は細胞だけではなく細胞外に存在し、生体あるいは組織の骨格構造をなす細胞外マトリックスも重要です。細胞外マトリックスの理解は軟部組織とその損傷の理解において大変重要であると考えます。本講義は従来の軟部組織損傷の総論に従って、軟部組織に位置づけられかつ整形外科的外傷・障害の発生しやすい臓器組織の組織学的特徴を取り上げ、かつその損傷の特徴を概説していきます。ただし、各組織において特徴的な細胞外マトリックスの特徴も合わせて概説していきます。最終的には軟部組織に存在する細胞の細胞外マトリックスを介した損傷・修復応答の理解を目指したいと考えています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎柔道整復学	運動器損傷治療学総論	後療法とは、「医療的リハビリテーション」と言われるものである。この後療法には、手技療法、運動療法、物理療法にわけることが出来る。手技療法には、「手で擦る軽擦法」「手でもむ柔捏法」等があり、種類、適用、禁忌がある。運動療法には、「局所的」「身体をリハビリ目的で動かす（全身的）」等、種類（環境）や強度、頻度の適用、禁忌がある。物理療法には、刺激、温熱、寒冷等の物理的的刺激を与える方法があり、適用、禁忌がある。いずれも、機能回復、疼痛緩和、心身の健康に向けられた療法で、患者の社会復帰の為に用いられている。この科目では、後療法の種類、適用、禁忌を学ぶだけでなく、その「効果」を生化学、心理学的側面から扱う。	
	運動器損傷の評価法	運動器とは、骨、関節、筋肉、神経等人体の外観的構造を成すものをいう。またこれは、ロコモーションの目的を持つ。この科目では、運動器解剖、生理学、運動学の知識を活用し、運動器疾患評価法の系統的アプローチの実践的評価法を理解する事にある。評価法の修得には、臨床整形外科の診察法を応用し、病歴、視診、理学検査（ROM・MMT）、運動分析、神経学的検査、鑑別検査等の徒手検査法に合わせて、各種画像診断の評価・診察法を総括して学修する。	
	骨損傷Ⅰ (肩甲帯～上腕)	本講義では、肩甲骨と鎖骨、上腕骨に起きる骨折について学修する。特に鎖骨骨折や上腕骨骨折は日常でも発生頻度が高く、また国家試験でも出題頻度が高いので、発生機序、分類、骨片転位、整復法、固定・後療法にわたり充分に解説する。それぞれの骨折について骨片転位に影響する筋作用について説明できることを目標とする。	
臨床柔道整復学	骨損傷Ⅱ (前腕～手指)	本講義では前腕骨近位端部の骨折から手指末節骨までの骨折について学ぶ。前腕骨近位部骨折は肘頭骨折、橈骨頭骨折、橈骨頸骨折を中心に講義を進める。接骨院においては臨床的に比較的少ない骨折ではあるが、国家試験の出題基準としては重要な項目であるので、骨折の外観、レントゲン写真を供覧しながら理解を深める。前腕骨遠位端部から手指の骨折は臨床的にも多く、国家試験でも頻出しているため、特に時間をかけて講義を進める。また、実技の授業とスムーズに連携できるように臨床的な内容も必要に応じて講義をする予定である。	
	骨損傷Ⅲ (下肢と体幹)	柔道整復骨損傷総論知識を基として、本科目では下肢骨折の各論を展開する。対象となる骨は、寛骨（骨盤骨）、大腿骨（近位部・骨幹部・遠位部）、膝蓋骨、下腿骨（脛骨・腓骨）、足根部骨、中足骨、趾骨等になる。それらの骨折の発生機序、骨片転位、臨床症状、合併症、整復・固定・後療法を理論的に学修する。また、これらの骨折は、整形外科的治療を必要とするケースが多く存在しているため、柔道整復施術の限界を見極める、鑑別診断、安全管理の知見は欠かせない。そこで、症例の所見から「柔整整形的知見の構築」を試み、学生と教員の双方向の意見交換を行うカンファレンスの授業を行い、「骨の接げる柔整師」の理論を身に付ける。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 臨床柔道整復学	関節損傷Ⅰ (上肢)	本講義では上肢の脱臼について講義する。肩関節、肘関節、肩鎖関節は特に発生頻度が高く、また指関節の脱臼は骨折との合併損傷もみられる重要な項目である。正しく損傷を捉え、評価する能力を身につけることを目標とする。 肩鎖関節・胸鎖関節の構造と機能、肩鎖関節損傷の発生機序、肩鎖関節・胸鎖関節（脱臼の分類・症状、整復法・固定法）、肩関節（脱臼の分類と症状、合併症、ヒポクラテス法、コッヘル法、ゼロポジション整復、固定法など）、肘関節（構造と機能、脱臼の発生機序・症状・合併症、整復法と固定など）、手関節・手根関節・MP関節などの脱臼とその症状、整復・固定法などについて学修する。	
	関節損傷Ⅱ (下肢と体幹)	関節損傷総論の知識を基に、体幹部と上肢の関節脱臼についての理論を学修する。対象となる関節部位を挙げると、顎関節、胸鎖関節、股関節、膝関節、膝蓋骨、足関節、脊椎関節等で、それらの脱臼発生機序、臨床症状、整復法、固定法、後療法について理論的、実践的に講義を行う。下肢、体幹の脱臼は、その併発症、続発症、後遺症等の合併症や、重大な後遺症に陥る可能性もある事から、整形外科的鑑別診断、柔道整復安全管理等のリスクマネジメントの知見を学修し、臨床場面に活用できる理論修得を狙いとしている。	
	軟部組織損傷Ⅰ (上肢と体幹)	上肢および体幹の、筋、腱、靭帯などの軟部組織損傷について学修する。 【科目特有の知識・技術についての到達目標】 上肢および体幹の軟部組織損傷に対する診察法、応急手当、治療法、後療法に関する知識を適切に活用できる。 【汎用能力としての学士力についての到達目標】 1. 知識をもとにした論理的思考能力により、患者の病態を的確に判断し適切な治療法を選択できる。 2. 患者の病態の判断、治療法の選択に際し、患者との良好なコミュニケーションを実践できる。	
	軟部組織損傷Ⅱ (下肢)	下肢の、筋、腱、靭帯などの軟部組織損傷について学修する。 【科目特有の知識・技術についての到達目標】 下肢の軟部組織損傷に対する診察法、応急手当、治療法、後療法に関する知識を適切に活用できる。 【汎用能力としての学士力についての到達目標】 1. 知識をもとにした論理的思考能力により、患者の病態を的確に判断し適切な治療法を選択できる。 2. 患者の病態の判断、治療法の選択に際し、患者との良好なコミュニケーションを実践できる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	臨床柔道整復学	アスレティックリハビリテーション論	アスレティックリハビリテーションとは、スポーツ競技者が競技へ復帰することを目標としてメディカルリハビリテーションに引き続き行うリハビリテーションである。本授業では、その概念、スポーツ障害の部位・疾患別のリハビリテーション、競技種目の種目特性によるリスク管理を考慮して、受傷後のトレーニング計画、さらに競技種目別のアスレティックリハビリテーションプログラム作成に至る過程でプレゼンテーションができるような実践技術の修得を目的とする。
		応用整復治療学演習Ⅰ	運動器損傷治療学では運動器系の外傷全般の診断と鑑別を中心に講義と実技を進めていく。まず1、2年生で学修した柔整理論における内容の確認を行ない、その知識をもとに臨床の現場において応用ができる知識の修得を目指す。講義では実際の症例を提示し、診断、鑑別、治療法選択の順に進めていく。また、講義を進める中で、次年度の国家試験合格を見据え、臨床的側面から国試出題基準レベルの知識の修得も目標とする。理論と臨床との融合が本講義における最大のテーマである。
		応用整復治療学演習Ⅱ	アスリートに生じる下肢の特徴的な外傷と疾患について、各疾患の疫学から診断法、治療法から競技復帰まで全体的に学修する。 【科目特有の知識・技術についての到達目標】 アスリートに生じる下肢の特徴的な外傷と疾患に対する診察法、応急手当、治療法、後療法に関する知識を適切に活用できる。 【汎用能力としての学士力についての到達目標】 1. 知識をもとにした論理的思考能力により、アスリートの病態を的確に判断し適切な治療法を選択できる。 2. アスリートの外傷発生から競技復帰まで良好なコミュニケーションを実践できる。
	柔道整復実技（臨床実習を含む）	運動器損傷治療学実習Ⅰ（包帯法）	骨折、脱臼、軟部組織損傷の施術には包帯法の技術が必須である。本講義では柔道整復師が取扱う巻軸包帯、の技法、冠名包帯を始め、厚紙副子、アルミ副子、プラスチック副子を用いた固定包帯について学修し、単元毎に実施する実技確認テストによって技術を身につけることを目標とする。 基本包帯法（環行帯、螺旋帯、蛇行隊、亀甲隊、麦穂隊）、冠名包帯（ウエルボー包帯、ジュール包帯、デゾー包帯）、厚紙副子（足関節・膝関節の副子固定）、プラスチック副子（プライトンシーネによる手関節部固定、キャストライトによる足関節固定）、金属副子（アルフェンスによる手指の固定、クラーメル副子による前腕の固定）などによる包帯法と実技に対する確認テストなどを通して学修する。

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 柔道整復実技（臨床実習を含む）	運動器損傷の評価法実習	柔道整復の施術過程には、観察・評価・整復・固定・後療・評価がある。先に挙げた観察・評価は、柔道整復師が行う診察（見立て）にあたり、後に挙げた評価は損傷の予後（治癒判断）にあたる。この科目では、人体の構造と機能、病理、衛生の総合的基礎医学の知見を理解した上で、問診、視診、触診、打診、計測という観察法の実技を修得し、損傷や病変に「気付く」目を養う。つまり、観察した身体の現象を客観的に見極めて、施術の選択（鑑別）をする評価法を学ぶことである。このことで、臨床現場に活用できる評価の知識・技術を身につける。	
	運動器損傷治療学実習Ⅱ（後療法）	柔道整復後療法概論で学んだ基礎知識のもとで、各療法の特徴をとらえ、手技療法、全身運動療法、局所運動療法の実技の修得を目指し、さらに物理療法として低周波電気療法、寒冷療法、赤外線療法、温熱療法などの実技を通して後療法全般の習熟を目指す。また、日常の後療法実施に当たり様々なシーンの中で、説明義務、機器による適応・禁忌症をしっかりと把握して、患者様への対応を含めたリスクマネージメントも合わせて研究する必要がある。	
	整復治療学実習Ⅰ（肩甲帯～上腕）	本講義では、上肢帯から上腕にかけての代表的な外傷に対する整復法・固定法（初期）の実技実習を行う。日常診療やスポーツ現場においても頻繁に遭遇する部位であるので、真剣に取り組んで欲しい。脱臼・骨折の技法、肩周辺固定方法を身につけることを目標とする。 具体的には、鎖骨骨折の整復法と固定法、肩鎖関節脱臼の整復法と固定法、肩関節脱臼の整復法（コッヘル法、ヒボクラテス法、ゼロポジション法、ラビン整復法など）、腱板損傷・上腕二頭筋損傷（肩軟部損傷の徒手検査法と後療法など）、上腕骨外科脛骨折（評価と整復法、固定法と後療法）、上腕骨骨幹部骨折（評価と整復法、固定と後療法）、上腕骨顆上骨折（評価と整復法、固定法）と実技に対する確認テストなどを通して学修する。	
	整復治療学実習Ⅱ（前腕～手指）	上肢（前腕～手指）の代表的な骨折、脱臼、軟部組織損傷の整復法および固定法について学修する。 【科目特有の知識・技術についての到達目標】 上肢（前腕～手指）の代表的な骨折、脱臼、軟部組織損傷の整復法および固定法を適切に実施できる。 【汎用能力としての学士力についての到達目標】 1. 整復法および固定法の原理と徒手整復法の限界について説明できる。 2. 整復法および固定法の実施に際し、患者との良好なコミュニケーションを実践できる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 柔道整復実技（臨床実習を含む）	整復治療学実習Ⅲ （頭・頸部・体幹）	臨床柔道整復学の下肢と体幹の骨折と脱臼理論および軟部組織損傷理論Ⅰで学修した肋骨骨折、椎体圧迫骨折、顎関節脱臼、頸椎捻挫、背部筋挫傷、腰部捻挫、腰椎椎間板ヘルニアなどの整復法、固定法、後療法について機能解剖、抹消神経チェック、患者様との施術誘導を含むリスク管理など接骨院での望ましい過程をケーススタディしながら施術者になる者、第1助手でサポートする者、その他助手、チームとしてどう対応してゆくかの実技実習を研究する。	
	整復治療学実習Ⅳ （下肢）	臨床柔道整復学の下肢の骨折理論（膝部、下腿部、足関節部、足指部）および下肢と体幹の骨折と軟部組織損傷理論Ⅱで学修した大腿骨頸部骨折、膝蓋骨骨折、脛骨骨幹部骨折、踵骨骨折、中足骨骨折、足指骨骨折、股関節脱臼、大腿部筋挫傷、膝靭帯損傷などの整復法、固定法、後療法について機能解剖、抹消神経チェック、患者様との施術誘導を含むリスク管理など接骨院での望ましい過程をケーススタディしながら実技実習を進めるものとする。	
	応用整復治療学実習Ⅰ	上肢・体幹損傷の評価と後療法実技では、肩、肘、手関節及び頸部、腰部の損傷に対する評価法と後療法を学ぶ。評価法に関しては、実際の症例を提示しながら、症状を確認し、鑑別疾患を行ない、保存療法と観血療法の選択を行う。後療法ではそれぞれの損傷に対して手技療法、運動療法、物理療法について実技を中心に授業を進めていく。最終的には1つの損傷に対するの初期判断からリハビリ、社会復帰に至までの臨床的能力の修得を目標とする。	
	応用整復治療学実習Ⅱ	本科目は、下肢急性損傷に対する、再評価法及び後療法を実践できる能力を身につける事を目的としている。下肢の骨損傷や関節損傷は、施術の結果として「構造的には」改善する。しかし、多くの損傷者が「関節拘縮」に陥るのは、筋肉、腱、靭帯、神経等の軟部組織の伸縮性が低下している事で発生している。つまり、関節拘縮の改善には、急性軟部組織損傷（肉離れ）の評価、後療法実技を修得した上で、その実践力を理論的、技術的に身に付けておく必要がある。手技療法、運動療法、物理療法等の柔整後療法は、医師、理学療法士、アスレティックトレーナー等のリハビリテーション理論を応用的に理解し、施術を実践できる能力修得をこの科目では目指している。	
	予防とコンディショニング	コンディショニングの概念を理解し、アスリートが競技活動において最高のパフォーマンスを発揮するための具体的な方法を学ぶ。スポーツ外傷・障害を予防するための手法を考え、プログラムするために様々な角度で研究し、学生が個人で、グループで、より効果のあるトレーニング方法やストレッチング、アイシングそしてテーピング技法について競技特性に応じた内容を実践できる能力を身につけ、スポーツ現場で活躍することを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	柔道整復実技（臨床実習を含む）	アスレティックリハビリテーション	講義で学んだアスレティックリハビリテーションの知識をふまえ、1)筋力回復、増強、2)関節可動域獲得、3)神経筋協調性、4)全身持久力回復、5)身体組成管理、6)再発予防、外傷予防といった実際のリハビリテーション、ストレッチング、トレーニング法について実習を進める。スポーツ競技という高いレベルで身体活動を実践するため種目特性に合わせてリスク管理までも含めた具体的なプログラム作成及び技術を身に着けることを目標とする。
		臨床実習 I	<p>医療人としての倫理観、マナー、服装、話し方などの基本を修得した上で、附属施術所で指導教員のもと、種々の疾患に対する診察法と治療法について見学実習する。 臨床実習 I の目標は以下の通りとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 柔道整復師としての基本的態度、患者さんとのコミュニケーションの方法を修得する。 2. 基本的な柔道整復対象疾患の診療技法を修得し、身体所見を正確に判断できる。 3. 検査所見から鑑別疾患、合併症を想定できる。 4. 総合的判断により保存療法の適否を判定し治療計画が立てられ、予後が予測できる。 5. 資料、文献の検索法を学び、対象疾患の情報収集と討論（プレゼンテーション含む）が行える。 <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>① 伊藤譲／4回 医療人としての倫理観、マナー、服装、話し方など実習に先立ったオリエンテーションを行った上で、基本的な柔道整復の診療技法、特に下肢について講義・指導し、対象疾患の情報収集法や実習総括の討論（プレゼンテーション）までを指導する。</p> <p>③ 猪越孝治／3回 附属施術所で行われている種々の疾患に対する診察法や治療法などの見学実習を指導した上、患者とのコミュニケーション方法や治療計画の立て方などについて講義する。</p> <p>④ 樋口毅史／4回 医療人としての基本マナーなどのオリエンテーションに始まり、柔道整復対象患者のうち、特に上肢の診療技法について指導する。また、検査所見から疾患の鑑別、合併症の想定などから身体所見の評価法について講義する。 次いで、資料・文献の検索法から疾患の情報収集法と実習の総括プレゼンテーションまでについて指導する。</p> <p>⑤ 服部辰広／4回 柔道整復対象疾患のうち、特に体幹部疾患の診療技法などについて講義、指導する。</p>

授 業 科 目 の 概 要			
（保健医療学部整復医療学科）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	柔道整復実技（臨床実習を含む）	臨床実習Ⅱ	オムニバス方式
		<p>これまでの学修の集大成として実施する。また臨床実習Ⅰの学修を深化させる。臨床実習Ⅱでは、一般的な柔道整復対象疾患に加え、アスリートの外傷・疾患についても実習する。</p> <p>臨床実習Ⅱの目標は、臨床実習Ⅰに以下の項目を追加する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各種競技の代表的な外傷・疾患を理解する。 2. アスリートの外傷・疾患についてスポーツ現場で適切に対応できる。 3. アスリートの外傷・疾患について検査所見から鑑別疾患、合併症を想定できる。 4. アスリートの外傷・疾患について総合的判断により治療計画が立てられ、予後が予測できる。 <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>① 伊藤 謙／4回 オリエンテーション、アスレティックリハビリテーション、スポーツ現場実習、プレゼンテーション</p> <p>② 久保山和彦／4回 スポーツ現場実習、アスリートの身体所見観察、アスレティックリハビリテーション</p> <p>④ 樋口毅史／4回 スポーツ現場実習、メディカルリハビリテーション、アスレティックリハビリテーション、プレゼンテーション</p> <p>⑤ 服部辰広／3回 スポーツ現場実習、メディカルリハビリテーション、アスレティックリハビリテーション</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	総合 整復医療総合演習 I	<p>これまで学修した基礎医学，臨床医学および柔道整復学関連領域の知識と理解を深め，知識の応用能力を身につけ，現代医学に立脚した治療の実践能力を問題演習により養成する。</p> <p>【科目特有の知識・技術についての到達目標】 種々の症例について，身体所見や画像所見などを根拠とする病態把握能力を獲得する。</p> <p>【汎用能力としての学士力についての到達目標】 知識をもとにした論理的思考能力により，種々の疾患の病態を的確に判断し適切な治療法を選択できる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(① 伊藤譲／7回) 解剖学と柔道整復理論及び関係法規の講義をする。解剖学では，特に柔道整復に関連が深い運動器の解剖を中心に演習する。また，柔道整復理論においては病態把握能力を獲得するために臨床実地問題により演習する。関係法規については，柔道整復師法やその他の医療関連法等について問題演習を通じて理解を深める。</p> <p>(② 久保山和彦／2回) 柔道整復に関連する生理学と運動学の講義をする。生理学では，病態把握の前提となる正常な人体の機能について理解を深めるための演習を行う。また，運動学では運動器の機能解剖について演習する。</p> <p>(③ 猪越孝治／2回) 柔道整復に関連する病理学と衛生・公衆衛生学について講義をする。病理学については，正常から逸脱した病的状態を理解し，柔道整復の臨床において，種々の疾患の鑑別能力を養成するための演習を実施する。衛生・公衆衛生学については，柔道整復の業務を行う上で地域の中で適切な医療を提供するための集団の疾病の予防や心身の健康維持に関して実践的な能力を養成するための演習を実施する。</p> <p>(④ 樋口毅史／2回) 柔道整復に関連する一般臨床医学と外科学について講義をする。一般臨床医学については，種々の疾患の身体所見や検査所見について，臨床実践能力を養成するための演習を実施する。外科学については，外科的処置を要する疾患や医師が行う外科的処置を理解するための演習を実施する。</p> <p>(⑤ 服部辰広／2回) 柔道整復に関連する整形外科とリハビリテーション医学について講義をする。整形外科については，種々の疾患の身体所見や検査所見について，臨床実践能力を養成するための演習を実施する。リハビリテーション医学については，特に運動器リハビリテーションを理解するための演習を実施する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部整復医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	総 合	<p>整復医療総合演習Ⅰの内容をさらに発展させ、外傷や疾患に関する臨床実地問題による演習を行い、臨床現場での問題解決能力を修得する。</p> <p>【科目特有の知識・技術についての到達目標】 種々の症例について、スモールグループによるディスカッションを通じて柔道整復師－患者間、柔道整復師－医療従事者間のコミュニケーション能力を獲得する。</p> <p>【汎用能力としての学士力についての到達目標】 知識をもとにした論理的思考能力により、種々の疾患の病態を的確に判断し適切な治療法を選択できる。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>① 伊藤 謙／7回 解剖学と柔道整復理論および関係法規について、柔道整復の臨床で求められる知識と実践能力について問題演習を行う。</p> <p>② 久保山和彦／2回 柔道整復に関連する生理学と運動学について、柔道整復の臨床で求められる知識と実践能力について問題演習を行う。</p> <p>③ 猪越孝治／2回 柔道整復に関連する病理学と衛生・公衆衛生学について、柔道整復の臨床で求められる知識と実践能力について問題演習を行う。</p> <p>④ 樋口毅史／2回 柔道整復に関連する一般臨床医学と外科学について、柔道整復の臨床で求められる知識と実践能力について問題演習を行う。</p> <p>⑤ 服部辰広／2回 柔道整復に関連する整形外科とリハビリテーション医学について、柔道整復の臨床で求められる知識と実践能力について問題演習を行う。</p>	オムニバス方式
		<p>卒業研究</p> <p>柔道整復師が取り組む損傷（スポーツ損傷を含む）および損傷に関連した基礎医学（生理学、生化学等）についてより深い知識を修得するため、関連雑誌（スポーツ医学雑誌等）の抄読を行う。またその上で卒業テーマを各々決定し、卒業研究および卒業論文の作成を行う。テーマは各々指導教員と相談の上決定する。臨床および基礎医学（生理学、生化学等）の研究に取り組み、新しい知見を得ることを目的の1つとする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部共通科目	言語コミュニケーション科目	医療英語 I	医学、医療に足を踏み入れるための基礎的知識のアプローチとなるよう、医療環境場面で使用される用語の意味やその定義およびその背景にある周辺医療情報や医学知識の基礎について、英語テキストや参考資料の読解を通して学修します。医療環境場面の初期対応に困ることのないような医療英語を身につけることを目標とします。英語を話す外国人の患者さんにも対応できるようになります。これはまた患者の立場として、みなさんが海外旅行先で急に病気になったり怪我をってしまったときにも大いに役立ちます。授業内容に関する視聴覚教材も適宜使用します。	
		医療英語 II	医療英語Iで学修した基礎的知識をさらに発展させ、特に医療人として医療現場で出会う可能性の高い医学英語、診療記録で使用頻度の高い英語などに慣れておくことが重要です。医療に関する英語の単語は比較的長くて一見難しそうですが、単語の語源がわかれば大いにヒントになります。例えば、electrocardiogram ⇒ electr (電気の) + o (結合形) + cardi (心臓の) + o (結合形) + gram (記録) ⇒ 「心電図」という具合です。また、英語で書かれた論文を読めるように、なお一層読解力の向上に努めます。	
		英語コミュニケーション I	本講義の目標は、「医療英語I」及び「医療英語II」において学修した医療英語の知識をもとにして、医療現場で外国人患者などとも必要最小限の英語による意思の疎通ができるようにすることである。英語による一般的な会話練習に加えて、医療現場の特殊性と医療に関する専門用語の知識が求められるので、「医療英語」の復習、さらなる発展的学修が必要である。これはまた患者の立場として、みなさんが海外旅行先で急に病気になったり怪我をってしまったときにも大いに役立つはずである。授業では視聴覚教材も適宜有効に利用する。	
		英語コミュニケーション II	本講義の目標は、「英語コミュニケーションI」で学修した英語コミュニケーション力が安定した力となるように復習も怠りなく、さらなる発展を目指す。また、医療現場を想定した英語による口語表現の修得だけでなく、将来の保健医療関係学会での英語による発表や英語論文の作成力まで視野に入れた学修を進める。これはみなさんが日本国内のみならず、国際的に活躍するときに大きな力と自信になるはずである。授業では視聴覚教材も適宜有効に利用する。	
教養科目	現代社会と憲法	憲法を意識して、日常生活を送っている人は少ない。一見、我々の生活とは関係ないと思われがちな憲法であるが、憲法の人権や統治に関する規定は、実は、さまざまな場面でかかわっている。すなわち、大学生生活、入社や解雇、報道のあり方、警察による捜査や逮捕、裁判員裁判、一票の格差等、身の回りの多くの出来事が、憲法と無関係ではない。とくに、将来医療従事者なる者は、インフォームド・コンセント、尊厳死などの終末期医療、宗教的輸血拒否等、重大な場面で憲法が関わってくる。本講義では、日本国民として知っているべき憲法の基本的な知識から、医療従事者として学んでおくべき論点まで、なるべく具体的な事例などをもとに学んでもらう。		

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	教養科目	変貌する社会と医療	日本の医療制度は①医療保険制度と財政②医療期間やマンパワーという医療提供体制——の二本柱で成り立っている。その両分野を多角的にわかりやすく講義し、医療の全体像を把握することを目標とする。同時に医療制度は、高齢化の進展、財政難というわが国の現状の前に、様々な面で改革が迫られており、その課題、解決策についても政府が進めている政策も政府が進めている政策も踏まえながら詳しく見ていく。併せて、医療従事者として求められるコミュニケーション能力などの必須要件などについても解説し、身につけてもらうことを目標とする。	
		こころと行動の科学	「心理学は長い過去と短い歴史を持っている」というエビングハウスの有名な言葉がある。長い過去とは心や精神・魂の存在について、短い歴史とは科学としての心理学をさしている。本講では心理学の長い過去から現在までの概略と、人間行動の法則性について新しい知見を加味しながら授業を進めていく。人間の心や行動の不可思議さを手掛かりとして、改めて人間についての興味を深めてほしい。また、この授業が今後学ぶであろう精神保健、カウンセリング、臨床心理学などの応用領域の基礎としての位置づけとなれば幸いである。	
		生命の科学	走る事も跳ぶ事も考える事も、病気も治療も全て生命活動の一部である。これらの全ては、驚くほど似た様な物質が驚くほど似た様な方法で制御される事によって遂行されている。これらの生命活動の仕組みを学ぶ。単に花の名前や臓器の形と名前を覚えるだけではなく、生命の仕組みを学んでほしい。生物科学は、ここ数十年で飛躍的な発展を遂げ、「遺伝子組み換え食品」や「遺伝子治療」、「iPS細胞」など、20年前には存在すらしなかった言葉が一般的に用いられる様になった。生き物としての人間の仕組みを知るために、さらに最新の知識を理解し活用するために、必要な基礎知識を身につけてもらいたい。	
		社会と人間生活	大きく変化する時代にあって、現実遭遇すると思われる様々な事象、例えば、教育、医療、労働、社会・経済状況などを通した諸課題について、社会的側面から多面的に捉え、社会と個人及び組織との関係性を考察し、課題解決に向けた取り組みを学修する。 具体的には、国の教育政策に大学がどう係るか、大学と地域活動との連携など大学を中心とした社会とのかかわり、さらには、若者と最近の労働環境の変化について、高齢社会の中での生き甲斐と健康生活の重要性など人間社会全体から捉えた具体的な取り組みを考察する。	
		スポーツ人類学	現代社会においてスポーツは人々の生活と密接な関わりを持つようになった。こうした背景には、社会が成熟しただけでなく、スポーツそのものも多様化してきたことにある。本講義では、私たちにとって身近となったスポーツという現象を人類学的な文脈（文化的・社会的）の中で理解していくための視点や方法を身につけることを目標とする。そのために、これまで提出されてきた人類学の学説史をベースにしながら、スポーツという現象を読み解いていく。また、最新の人類学理論をスポーツ場面にいかに応用していくのかについても説明する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	科学思想史	西歐古代以来の歴史において、「科学」の誕生と発展は哲学・思想の展開と深く関わっている。そしてまたこれらは産業・経済・社会の動態と密接に関連している。この授業では、ギリシャ古代以来の西歐における哲学・思想の歴史と科学の生育のダイナミクスを分析する。またこれらと比較して、日本の近代化と日本人の意識を検討し、現代の我々の課題を考察する。	
	文学と人間	歴史および文化の状況下を見事に生き抜いた様々な人間像を活写する優れた古典的文学作品について、作品が生まれ享受されてきた<時代>や<社会>の特質に注目しつつ多様な側面から分析し読み味わってみることをとおして、作品にこめられた「価値観」「恋愛観」「美意識」「死生観」などの諸相を浮き彫りにしていくことを目的とする。 文学作品や関連資料を、古典作品については現代語訳を提供しつつ、じっくりと読み解き、個性的で魅力的な作中群像と彼等が関わった恋愛や事件や合戦に想いを馳せていく。	
	発育発達論	本講義では、発育発達や加齢に関わる身体の変化を中心に学んでいきます。具体的には、胚子期から老年期の身体の変化を形態的側面と機能的側面の大きく2つに分けてみていきます。 形態的側面では、骨格、歯牙の発育、身体組成や姿勢の変化、などを取り上げます。機能的側面では、筋の発達、神経系・感覚の発達、エネルギー代謝系・呼吸系の発達、循環器系・内分泌系の発達、運動能力の発達に分けて講義を行います。さらに、子どもの体力低下の問題、女性や障害者の運動能力の特徴、中高齢者の体力の特徴にも着目します。 本講義の目標は、発育発達や加齢に関わる身体の変化を理解することです。さらに、子どもの体力低下の問題、障害者や女性の体力の特徴にも着目し、特に環境要因が発育発達に及ぼす影響について理解を深めることです。	
	総合科目	日体大の歴史 (日体伝統実習を含む)	日体大の歴史を紐解くことは、近代日本の体育及びスポーツの歴史を語ることに通ずると言われる。設置者である学校法人日本体育大学は、「国民体育」の振興を目指して明治24（1891）年8月に創設され、以後時代のニーズに積極的応えてきた。本講義では、日本のスポーツ界を支えてきた日本体育大学の歴史を振り返ることによって、日体大が果たしてきた役割（社会的使命）について再確認するとともに、医療分野でも社会貢献できる体育、知育、徳育に優れた医療人を育成するための将来を見据えた日体大の学生としてのアイデンティティを醸成しようとするものである。

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	総合科目	野外活動実習	<p>本実習は、野外での自然体験と野外スポーツを通して、自然環境の偉大さ、危険性の理解を深めたうえで、それを安全に活用できること、さらに環境問題を意識した能力や態度を養う。また、集団生活を通して、仲間とのコミュニケーションを図り、自主性、協調性、社会性を身につける体育関連指導者、アスリート、医療人として社会貢献できる人材の育成を行うことを目的としている。その内容は、水の事故から身を守るウォーターセーフティやスノーケリング等である。また、陸上での事故から身を守る救急法やキャンプ等である。</p> <p>キャンプ設営、自然環境観察、救急法講習、スノーケリングプール講習、スノーケリング海洋実習、ウォーターセーフティ講習等を3泊4日で実習する。</p> <p>(④ 黄仁官/21 小泉和史 共同で担当)</p>	共同
	数理・情報系	数理科学	<p>自然現象や日常生活の様々な事象が数学を用いて解析される。この科目では、数学を単なる技術学習としてではなく、日常と結びつけた論理学習として、種々の事象例の解析を学修する。微分や積分がどのような問題の理解に役立つか、身近な物理学の素材などにも触れる。微分とは何か、初等関数の微分、速度、加速度、地震の強度、等速円運動、三角関数の微分などについて学修し、積分とは何か、面積・体積を求める、仕事、力の積分などから積分について学修する。更に、製造業における最適発注量の算定、借金の返済など日常生活と数学のかかわりについても考察する。</p>	
		統計学	<p>統計学とは、ある集団の調査資料や測定データを基に、その集団の傾向・性質等を数値として算出し評価・解釈を行う上での根拠を提供する学問である。本講義では、医療分野で用いられている統計学に関して、演習形式を取り入れ、実際に測定データの収集から、統計処理及びその評価まで実践・学修する。</p> <p>具体的には、基本データの度数分布、グラフ作成と演習、平均値、中央値の算出、分散と標準偏差、標準誤差、正規分布などについて学修。2つのデータの関係について、相関関係、散布図、回帰方程式の算出、図表の作成、統計処理などについて学修、まとめとして統計の課題と将来の展望について講義する。</p>	
		情報機器の操作	<p>1. 授業用情報システム、2. MUA、エディタ、表計算のソフトウェア、3. デジタルファイルの複製や管理について理解することによって保健医療等の現場でPCを活用できるようになるための素養を身につけることをめざして授業を行う。また医療関連で多く用いられる画像データの取り扱いについても学修する。</p> <p>具体的には、ネットワークセキュリティとMUAに関する演習、MUAと添付ファイルの課題演習、タッチタイプと文書作成、ファイルシステムと課題作成のためのファイル管理、デジタル周辺機器の活用とデータ整理、デジタル画像の課題演習、情報検索と課題の演習などについて学修する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	生物学系	基礎生物学	医学の理解に必要な生物学の基礎について学ぶ。高校で学んできた生物学の知識を基に、より専門的な内容を扱いながら人体のしくみについて理解を深めていく。合わせて、種々の病態や疾患の理解に必要な、医学的用語や関連知識についてもおさえる。(1)すべての生物は細胞からできている（細胞が生命の単位になっている）こと、(2)遺伝と遺伝子発現について理解すること、(3)医学的トピックを理解するのに必要な基礎知識を身につけることを目標とする。
		細胞生物学	ヒトの体は細胞から成り立っています。iPS細胞が医学分野で非常に重要視されており細胞を基盤とした再生医療が次世代医療の中核をなすとみなされている現代において、細胞生物学の理解が医療従事者にとって必須であることを物語っているといえます。本講義では細胞と遺伝情報の関わり、細胞内小器官とその機能、細胞を形作る細胞骨格、細胞内代謝およびエネルギー合成などをまず概観します。次に細胞分裂、シグナル伝達、発生と分化などを学習することで多細胞系の理解を目指します。最終的に細胞を基礎とした個体の生理学的理解の学習を目指したいと思います。

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	体育 学系 アスレティックトレー ニング（基礎）	<p>アスレティックトレーナーの学問的・職業的領域であるアスレティックトレーニングについて概説する。アスレティックトレーナーの役割を1. スポーツ外傷・障害の予防、2. スポーツ現場における救急処置、3. アスレティックリハビリテーション、4. コンディショニング、5. 検査・測定と評価、6. 健康管理と組織運営、7. 教育的指導の7項目から学修しアスレティックトレーナーとしての基本的な姿勢を理解することを目標とする。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（④ 黄仁官／2回） アスレティックトレーナーの役割・任務・業務についてチーム競技・個人競技に分けて学修する。 また、ドクター、理学療法士など医学スタッフ、バイオメカニストなど科学スタッフ及びコーチとの連携・協力について学修する。</p> <p>（9 志村広子／1回） アスリートの健康管理及びアスレティックトレーニングにおける組織運営についてアスレティックトレーナーの立場から学修する。</p> <p>（10 村田由香里／1回） アスリートや学生トレーナーなどに対する教育的指導について学修する。 また、国際コーチ連盟の定めるコーチの倫理規定をもとに、倫理的な問題について学修する。</p> <p>（24 河野徳良／7回） アスレティックトレーナーとは何なのか免許・資格など国内・国外の現状について学修する。 また、アスレティックトレーナーの役割として最も重要であるスポーツ外傷・障害の予防について、それらの発生メカニズム、スポーツ現場における救急処置（外傷・障害の評価と手順）について、スポーツ現場における救急処置（RICE処置、心肺蘇生法など）について学修する。 さらに、競技復帰を目的とするリハビリテーションであるアスレティックリハビリテーション競技スポーツにおいて勝つための全ての準備であるコンディショニングについてアスレティックトレーナーの立場から学修する。*実技含む</p> <p>（26 櫻井規子／4回） 検査・測定と評価（姿勢・身体アライメント・筋委縮）、検査・測定と評価（関節弛緩性・筋タイトネス）について学修する。*実技含む また、検査・測定と評価（関節可動域）、検査・測定と評価（徒手筋力検査・筋力・筋パワー・筋持久力）についても学修する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	体育 学 系	<p>アスレティックトレーニング論（基礎）で学修した内容を基礎とし、アスレティックトレーナーの役割として最も重要な外傷・障害の予防について学修する。前半では歩行、走運動、ストップ、方向転換、跳躍動作、投動作など基本的なスポーツ動作の観察と分析から外傷発生機転メカニズムを学ぶ。後半では冬季種目、記録系種目、球技種目、ラケット種目、採点種目、格技系種目など各種目の競技特性を理解し競技特有の外傷・障害を知り、予防法を見出しさまざまなスポーツ現場に対応できる能力を身につけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(④ 黄仁官／1回) 陸上競技における競技特性と外傷・障害予防について学修する。スポーツ復帰のための機能的・体力的到達目標について講義する。*実技含む</p> <p>(9 志村広子／1回) 水泳競技における競技特性と外傷・障害予防について学修する。スポーツ復帰のための機能的・体力的到達目標について講義する。</p> <p>(10 村田由香里／1回) 採点種目である、体操（新体操等）における競技特性と外傷・障害予防について学修する。スポーツ復帰のための機能的・体力的到達目標について講義する。*実技を含む</p> <p>(24 河野徳良／8回) 歩行、走運動の観察・分析と外傷発生機転メカニズム、ストップ、方向転換、跳躍動作の観察/分析と外傷発生機転メカニズム、投動作の観察/分析と外傷発生機転メカニズムについて学修する。*実技含む また、種目特性と外傷・障害予防としてラグビー、アメリカンフットボールなどのタックル時のあたり動作の観察/分析と外傷発生機転メカニズムについて、バスケットボール、ハンドボール、野球、ソフトボールにおける競技特性と外傷・障害予防について、柔道、レスリングにおける競技特性と外傷・障害予防について学修する。</p> <p>(26 櫻井規子／4回) スポーツ/フィギュアスケートなどの氷上種目、スキーなど雪上種目における競技特性と外傷・障害予防について学修する。 また、ラケット種目のテニス、バドミントンにおける競技特性と外傷・障害予防についても学修する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	体育 学系	<p>コンディショニング</p> <p>アスリートが目標とする試合で成功するためには、日々刻々と変化するコンディションを計画的に調整しコンディショニングを行うことが重要である。アスレティックトレーナーはアスリートのコンディションを調整するスペシャリストの役割を担わなければならない。コンディショニングの維持、向上させる手段としてマッサージ、ストレッチング、時にはテーピング等を行うことは有用であり、ここではこれらの手段を用いてコンディションの調整法を学修することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(④ 黄仁官／2回) コンディショニングの意義と必要性について学修する。 また、コンディションを把握するための指標としてダイナミック/スタティックアライメント、関節柔軟性、筋柔軟性について学修する。 *実技含む</p> <p>(9 志村広子／1回) 下肢（足部・下腿部）におけるマッサージ及びストレッチングの方法と効果について学修する。その部位のスポーツ外傷・障害の予防と疲労回復について、具体的に解説する。</p> <p>(24 河野徳良／8回) マッサージ及びストレッチング：マッサージの手技、目的、効果及びストレッチングの種類、効果について学修する。 特に、下肢（大腿部）、腰部、上肢（前腕・手）におけるマッサージ及びストレッチングの方法と効果について学修する。 テーピング：足関節、膝関節・股関節、体幹、肩関節・肘関節・手関節のテーピングについて学修する。</p> <p>(26 櫻井規子／4回) 背部、頸部、胸部、腹部、上肢（肩・上腕）におけるマッサージ及びストレッチングの方法と効果について学修する。その部位のスポーツ外傷・障害の予防と疲労回復について、具体的に解説する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	基礎 医学系	<p>医学・医療の歴史的推移を概観した後、健康とは何か、医療の本質、医学・医療は誰のものか、医の倫理、生命倫理、患者の人権、死生観、サイエンスとしての医療とアートとしての医療、医の心、医療従事者に求められるもの、患者とのコミュニケーション、インフォームド・コンセント、医師法・医療法、ターミナル・ケア、安楽死、日本の医療システム、ヘルスプロモーション、医療事故と医療裁判、医療と科学技術等、医療に関わる様々な現代的課題から医療の本質を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 武藤芳照/4回) 健康とは：WHOによる健康の定義に基づき、健康の捉え方、健康の概念の変遷について講義する。 医療とは：医療は誰のものか、医療の本質のあり方について講義する。</p> <p>(① 朝日茂樹/3回) 医の倫理(1)：ヒポクラテスの誓い、ヘルシンキ宣言等にはじまり、生命倫理学について講義する。 医の倫理(2)：ターミナルケア、安楽死等、医療をめぐるさまざまな倫理問題について講義する。 医の倫理(3)：インフォームド・コンセントの目標、前提について講義する。</p> <p>(3 成田和穂/3回) サイエンスとアートとしての医療：医療の科学的側面と技術的側面について講義する。 医の心：医療従事者が身につけておくべき心構え、基本姿勢について講義する。 医療従事者と患者とのコミュニケーション：診察、検査、治療、リハビリテーションの場面でのコミュニケーションの方法と内容について講義する。</p> <p>(12 平沼憲治/2回) 西洋医学史：ヒポクラテスにはじまり、ギリシャ医学—中世の医学、疫病の時代、近代医学への道について講義する。 東洋医学史：中国を中心とした医学、特に漢方、針治療（麻酔）について西洋医学と対比させ講義する。 日本医学史：江戸時代、長崎出島のオランダ医学、シーボルト、緒方洪庵、杉田玄白「解体新書」にはじまり、日本医学が近代化していく歴史について講義する。</p> <p>(15 川上順子/3回) 医師法・医療法：医療従事者に必要な基本的法律知識と法的対応について講義する。 医療事故・医療裁判：実際の事故、判例から医学・医療の現場の課題について講義する。 ヘルスプロモーション：WHO1986年オタワ憲章に基づいて、健康増進・疾病予防のための教育方法等について講義する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	基礎 医学 系	公衆衛生学 I 公衆衛生学 I の目的は、人々の疾病を予防し、健康の保持・増進をはかり延命をもたらすことである。したがって、人々の健康を守り高める努力は、社会の中の個人と社会の組織的活動によるものが一体となって進められる。そこで公衆衛生学では、個人と社会組織を併せた健康づくりの基礎的知識について理解を深める。さらに、疾病や健康障害の発生要因がいかなる状況下において起こり得るか、それらの予防に関する基礎的知識についても理解を深める。主な内容として、①健康の概念、WHOについて、②疾病予防と健康管理、③生活環境衛生、④労働衛生、などである。	
		公衆衛生学 II 公衆衛生学の目的は、人々の疾病を予防し、健康の保持・増進をはかり延命をもたらすことである。公衆衛生学 I では総論を中心に学修したが、公衆衛生学 II では個人の成長とそれに関わる社会組織を併せた健康づくりについて理解を深める。主な内容として①母子保健、②小児保健、③学校保健、④生活環境保健、等である。 具体的には、母子健康（母子保健総論、母子の関わる衛生統計、妊娠と出産）、小児保健（乳・幼児の発育と健康、感染症と生体防御、小児伝染病、予防接種）、学校保健（健康増進に関わる管理と教育、保健管理と学校感染症、今日の健康問題・心の健康問題）、成人保健（3大死因、肥満、高血圧など）、生活環境保健（喫煙、食中毒など）などについて学修する。	
		解剖学 I 解剖学は人体の正常な形態と構造について学ぶもので、医療系学生にとって、基礎医学の中でも最重要科目のひとつである。救急医療学を学修する上で、特に重要な循環器系、呼吸器系、脳神経系、内臓などを中心として系統解剖学的視点から学修を進める。主に救急処置の対象となる心臓・肺や脳血管系の局所解剖に付いても詳細に学修する。更に、消化器系（食道から直腸・肛門までの消化管、肝臓、膵臓などの消化腺）、腎臓・膀胱などの泌尿器系、男女生殖器系と眼・耳・皮膚など感覚器系についても学修をする。 (オムニバス方式／全15回) (22 小林正利／12回) 救急医療の対象となる事の多い心臓を中心とした循環器系、呼吸器系、神経系および消化器系、泌尿器系について主に肉眼解剖所見を中心として講義を行う。 (29 唐沢延幸／3回) 骨格系、筋系などの運動器と視覚、平衡感覚、皮膚などの感覚器について講義する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基礎医学系	<p>解剖学Iでは人体の正常な形態と構造について系統解剖学的視点にたつて主に肉眼解剖レベルの学修を行って来た。解剖学IIでは人体を組織学（顕微鏡レベル）さらには超微細構造（電子顕微鏡レベルレベル）までの観察を通して学修を進める。救急医療の主な対象器官である循環器系心臓の組織学レベルの観察、呼吸の本態である肺のガス交換の場の微細構造、脳の血液-脳関門の微細構造などについて学修を進める。さらに消化器系、泌尿生殖器系、感覚器系など内臓諸器官についても組織学的視点からの学修を行う。最後に人体解剖体の見学実習を通して、人体の三次元構造について学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(22 小林正利/11回)</p> <p>人体構造の最小単位である細胞から上皮組織、結合組織、軟骨組織、骨組織などの支持組織、筋組織、神経組織などの組織総論、循環器系、消化器系、呼吸器系（血液-空気関門の微細構造）、泌尿器系（血液-尿管門）、生殖器系について顕微鏡レベルの人体の形態について講義する。</p> <p>(29 唐沢延幸/4回)</p> <p>視覚器（眼球）、平衡聴覚器（耳）および皮膚などの感覚器系、内分泌系と神経系（シナプス構造など）について顕微鏡レベルの形態学について講義する。人体解剖見学実習の指導を行う。</p>	オムニバス方式
		<p>人の生命現象は、分子、細胞、器官、個体の各レベルにおいて、精巧なメカニズムによって統御と協調を保ちつつ営まれる。生理学はこの生命現象を物理化学的基礎と方法に基づいて機能的側面から究明する学問であるので、生理学Iでは広い観点から生物に共通する現象や法則性を述べる。さらに医療人の育成が主目的であるから人体生理学を解説する。具体的には、血液系、循環器系、呼吸器系、消化器系、栄養と代謝、体温調節、腎体液、内分泌系、筋肉、神経の基本的機能、中枢神経系、高次神経機能、感覚の一般的性質、体性感覚、内臓感覚、特殊感覚の基本的知識を理解させる。</p>	
		<p>血液系、循環器系、呼吸器系、消化器系、栄養と代謝、体温調節、腎体液、内分泌系、筋肉、神経の基本的機能、中枢神経系、高次神経機能、感覚の一般的性質、体性感覚、内臓感覚、特殊感覚の基本を学修した生理学Iの知識をベースに、生理学IIでは、学習者自身を中心となり、反省的反复の作業を伴いながら実践する少人数グループの教育法であるPBL (problem-based learning) を導入して学修する。この方法により、医療人に求められている「患者との良好なコミュニケーションをもっている患者の対話者」になり得る。14回の授業はすべて課題或いは症例を提示し、これをグループ毎に調べ、ディスカッションし、解決する。</p>	

別記様式第2号（その3の1）

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	基礎 医学 系	生化学	<p>ほぼ全ての生理学的反応は生化学的反応の積み重ねによって達成されているため、医療の分野において生化学は全ての学問の基礎になるといえます。本講義では生体を構成する生体高分子であるタンパク質、脂質、糖質、核酸などの化学的構造を学習します。さらに生化学反応の主体ともいえる酵素の特徴を概観し、酵素によって触媒される主要な生体高分子の代謝および生合成反応に言及します。加えて細胞内外における情報伝達物質とその作用機序を解説します。最終的に医療従事者にとって基本となりうる生化学的基礎的知識を得ることを本講義の目標とします。</p>	
		病理学	<p>病理学は、病気の原因を探求する学問である。近年の分子生物学の進歩により、病因の遺伝子レベルでの解析も進んでいるが、なお、病気の組織変化を詳細に観察し、記録するという従来の方が主流であることは言うまでもない。その意味で、病理学とは、過去の膨大な病気の記録を、整理して今後の治療に生かす、唯一の方法ともいえよう。さまざまな疾病の本態を系統的に理解し、知識として身につけることで、医療人の一員として活躍できる能力を養いたい。</p>	
		微生物学	<p>近年の生活環境の向上、医療技術の進歩により、疾病における感染症の割合は減少している。とはいえ、感染症を制御することは、なお医療現場での重要な課題であり、また以前にはなかった新興感染症の発生も問題となっている。感染症の原因となる病原微生物は、日常的に経験するものから、非常にまれな存在まで多種多様であるが、その大きさから、直接、観察し難いという特徴を持つ。そのためには、病原微生物に対する正しい基礎知識を習得することで、将来の医療人としての感染症コントロール能力を養いたい。</p>	
		血液学	<p>血液は、ヒトの体の全身に分布しており、生命現象において重要な役割を担っている。その成分と機能を正確に理解することは、各種疾患を理解するうえでも大切である。一方で、疾患によっては、血液に特徴的な変化が現れるものがある。病気の診断において、血液検査が重視されるのは、そのためである。健康診断などで、日常的に眼にすることの多い基本的な血液検査データを理解し、また血液の異常に起因する疾患を概説し、生命科学理解への一助としたい。</p>	
		免疫学	<p>われわれが生活する周りには無数の微生物が存在し、それらからの感染に対して免疫力を持つ。すなわち、免疫とは「自己と非自己」の原理によって生体にとって危害となるような異物や不都合なものを排除し、生体を正常に保つ役割を担うものである。しかし、免疫系の破綻や過剰な反応は、時に生体を攻撃し疾患を惹起する。本講義では、健康に関わる免疫について基礎から学び、免疫疾患、さらにはスポーツと免疫との関わりについても学修する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	基礎 医学 系	薬理学	<p>薬理学では、臨床で使用される薬の名前を覚えるだけでなく、生理学の知識を基礎にして、薬の生体内動態、安全性と有効性、薬の副作用・副作用の発現機序などについて学び、薬の基礎知識と薬物療法の実践を理解する。特に救急救命に関連する薬について重点的に学修する。</p> <p>基本的に薬は生体にとって異物であり、まったく安全な薬は存在しない。従ってこの科目では、薬の基礎知識を習得し、安全な薬物療法を行うための方法、考え方を習得し、薬物療法に応用できる力を習得することを目標とする。</p>	
		救命救助法	<p>当科目は第一種衛生管理者取得のための必修科目であるばかりでなく、災害時や海、山での遭難時に備え、救命救助法を身につけておくことは、保健医療学部学ぶ者の責務である。</p> <p>本実習では映像資料等を用いてこれらの事故の実態と救命救助体制、防災計画などについて学ぶとともに、救命救助法の技能を修得する。最終試験に合格した者には、横浜市消防長より「上級救命技能認定証」又は「応急手当普及員認定証」が交付される。</p> <p>(オムニバス方式全15回)</p> <p>(②小川理郎/2回) 救急法概要、救急現場のトリアージについて講義及び実習指導をする。</p> <p>(⑤岡部綱好/13回) 交通事故、水難、山岳遭難、震災の救命救助体制、防災計画、救助法、心肺蘇生法、出血・骨折・熱傷に対する応急手当、傷病者管理法、搬送法、AEDの取り扱い等について講義及び実習指導をする。また、最終2回の授業で救命救助法のスキルチェックを行う。</p>	オムニバス方式
	救急 医学 系	内科学 I	<p>循環器疾患は、どのような機序で発症するのか、心臓の構造と機能との関連から概説する。また、刺激伝導系と心電図の基本を踏まえ、不整脈の発生機序と治療法について解説する。</p> <p>さらに、虚血性心疾患、心臓弁膜症、先天性心疾患、心筋症、大動脈疾患、肺動脈疾患、高血圧症などの心血管疾患について、その疾患概念、成因・病因、病態生理、臨床症状・症候、検査・診断、治療などについて、概要を教授する。理解を深められるよう、適宜、症例提示を行う。</p> <p>目標：①循環器疾患の病態生理及び症状・症候を説明できる。②循環器疾患の検査を理解し、基本的な心電図は読める。③循環器疾患の治療及び長期的なケアについて説明できる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	救 急 医 学 系	内科学Ⅱ	神経系疾患は中枢神経、末梢神経、自律神経の正常機能と比較し異常の臨床を学んでいく必要がある。神経疾患を理解するためには、その疾患が存在する部位の特定と病因診断を基礎にして考える方法を学ばなければならない。さらに、それらの疾患が血管障害、感染性、神経変性、代謝性、脱髄性、先天性と言ったカテゴリーのどれに相当するのかを判断する必要がある。神経疾患では、患者の意識が低下していることも多く、診断には神経学的診断技術を会得する事が必須であり、精神状態、高次機能、運動機能、反射、脳神経検査について学び、診断技術を体験する事が求められる。
		内科学Ⅲ	生体の活動に必要なエネルギーを産生するには、大気から酸素を取り入れ細胞でエネルギーを作り、その結果生じた二酸化炭素を体外へ排出する。この役目を担うのが呼吸器系である。従って、呼吸器疾患を学ぶには、正常呼吸機能を知っておかなければならない。その上で、気管、胸膜、肺における感染、腫瘍等の疾患がどのような症状を引き起こすのか換気障害、免疫異常、について習得する。
		内科学Ⅳ	大きく二つの項目に分かれる。1. 消化器系の疾患の基礎を学び、消化管から肝臓、胆道、膵臓の疾患について、救急医療に必要とされる基本的な知識を得る。2. 血液、造血器とその疾患は、血液の働き、血球細胞の種類、血液凝固や止血について学び、さらに血液疾患について学ぶ。 具体的には、逆流性食道炎、食道静脈瘤、食道異物などの食道疾患、先天性幽門狭窄症、急性胃炎、消化性潰瘍などの胃疾患、腸の炎症の原因・症状について、腹膜炎・腸間膜炎、肝疾患の検査、肝炎の種類、胆嚢炎・胆石などの胆道疾患の検査・症状・治療、消化器疾患の総括として悪性腫瘍について、血液の役割・機能、貧血の症状・治療、輸血・血液浄化などについて学修する。
		内科学Ⅴ	(1) 生体が機能するために、多くの酵素が機能しており、酵素の活性を調節するためには生体の酸塩基平衡は重要である。生体の酸塩基平衡調節には、腎臓と肺の調節が重要である。また、成人では体重の60%が水（体液）であり、その調節と体液中に存在する電解質は神経の活動等の生命現象に重要な意義を待つ。 (2) 免疫は、生体防御に必要なシステムであるが、自己を非自己として認識する自己免疫疾患や反応が過剰におこるアレルギー反応は、時には生命に関わることもあり、免疫機構を理解する事は重要である。

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	救急医学系	内科学VI 内分泌代謝性疾患および老化に伴う疾病・異常の病態生理、検査、治療の概要について学び、実際の臨床における疾病・異常のとりえ方、ケアの注意点などについて重点的に学修する。 三大栄養素とエネルギー代謝の基本について概説した後、各論的に学修する。血糖調節にかかわるホルモンとその作用機序、糖尿病の病因・治療の概要、脂質代謝のしくみと脂質異常症（リポ蛋白の代謝と脂質異常症に対するケア、動脈硬化のメカニズムと疾患に対するケア）、尿酸代謝異常と痛風、血圧の調節機構と疾患、ホルモン分泌調節と疾患、代謝性骨疾患（骨粗鬆症など）、i P S細胞と再生医療、酸化ストレスと疾患、長寿関連遺伝子、メタボリックシンドロームの予防とケアなどについて学修する。	
		医療コミュニケーション学 医療現場における対人関係を、医療人類学研究領域の知見を活用し、医療的対人関係の構築過程を分析的、理論的に扱う。特に救急医療の場では、一般的なホスピタリティーの知識に加え、自傷的行為による傷病者に対する特殊なケースに対応する知識も必要となる。これらは、従来の心理学に加え、現代的な応用心理学の理解をも必要としている。本科目においては、傷病者の環境、傷病原因、年齢等様々な状況に対応できる医療人の「対人関係能力」の向上を目的とした講義と対人スキルの理論・実技を行う。	
		医療安全論 循環器疾患で高い頻度で認められる症状や徴候から、想定される疾患について解説する。また、症状の部位・程度やその表現の解釈、徴候の観察のポイントなどを示し、関連する疾患や重症度の解釈について、実例を交えて解説する。さらに、症状・徴候から、救急処置の対処法について教授する。 目標：①症状・徴候から、可能性の高い疾患を列挙できる。②症状・徴候から、循環器疾患の鑑別診断について説明できる。③症状・徴候から、行うべき救急処置について説明できる。（成田） 医療の高度化・複雑化に伴い、医療安全の重要性は増している。とりわけ救急救命の場面においては、二次災害や金箔した条件下での判断と処置を迫られるなど、安全が脅かされる場合が少なくない。 本科目では、医療事故に対する個人と組織のリスクマネジメント、事故発生メカニズムと防止の対策、医療事故回避の方法、事故発生後の対応のあり方等を学ぶ。（武藤） （オムニバス方式／全15回） (1 武藤芳照／7回) 医療安全論外科系として、事故発生メカニズム、医療安全の考え方や安全対策、救急救命の場面で起こりやすい医療事故とその構造、医療従事者・実習生の安全、医療事故の原因分析演習・危険予知トレーニング（グループワーク）を学修する。 (3 成田和穂／8回) 医療安全論内科系として、循環器疾患の主要症状・兆候、呼吸困難、胸痛、胸部圧迫感、動悸、失神、脈拍異常、皮膚状態、浮腫、チアノーゼについて学修する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	救急 医学 系	救急医学概論	<p>医の倫理と生命倫理、救急医療体制、病院前救護体制（救急車で搬送中の診断、治療）における救急救命士の役割など、救急医療の全体像と問題点の把握について学修する。急病者、負傷者、大規模災害発生時などの現場で必要とされる救急救命全般にかかる知識、診断力、救命技術や大小の外傷に対する適切な処置法と共に一般市民指導の基礎となる心肺蘇生法の理論と実施方法も学修する。特に生命を扱う職業に従事するものとしての健全な倫理感を初期から養えるように、国内事例、海外事例などを紹介し討議していく。救急医療システムの問題点の抽出とその解決法についても学修する。</p>	
		救急処置総論	<p>救急現場における一般負傷者、傷病者への速やかな全身観察、局所観察の意義を学び、異常所見に対する適切な方法を学修する。現場における簡易検査、初期治療、また大量被災者に対するトリアージ、家族、関係者への接遇法、受け入れ病院交渉なども実例をもとに学修する。</p> <p>救急現場で行われてきた処置の歴史と今後の課題について概説したうえで、以下の学修を行う。</p> <p>救急活動の基本（救急現場で必要とされる基本的資質・技能）、全身所見、局所所見の把握法、重症度・緊急性の判断、救急・救命処置に関する局所課題／重点処置、在宅療養者に対する処置、災害時の救急医療、救急医薬品と検査、感染症と予防・安全管理、特殊な救急現場（放射線事故、バイオテロなど）、想定した救急現場における問題点描出などについて学修する。また、近年都市型の大量負傷者発生事案（無差別テロ）、自然災害（洪水、地震）にも対応できる心づもりを形成する。また、国際的に通用する医療人の実現の具体的手段として、欧米諸国のプレホスピタルケアの進んだ国々の有用な画像・動画、パラメディックスの紹介による啓発を行う。</p>	
		救急処置各論	<p>切迫した救急現場において求められる一般負傷者、傷病者への適切な処置の選択、特定行為（除細動、気管挿管、静脈路確保、薬品投与）などについて、理論と実際を学修する。模擬現場で実施訓練をする。</p> <p>救急蘇生法（概論、心肺蘇生法、気道確保、人口呼吸、胸骨圧迫、脳死、来院時心肺停止例、検視などの社会的・法的問題）、救命士の特定行為（気管挿管、人口呼吸に必要な解剖学、呼吸生理学、除細動、致死的不整脈の鑑別、AEDの使用法、静脈路確保、医薬品投与など）、ショックへの対処法（出血性ショック、内因性ショックなど）、急性中毒への対処法、環境障害に対する対処法、内因性救急（腹痛、胸痛、老人、妊産婦、小児、新生児の救急処置など）、外傷（頭部、頸部、脊椎損傷、四肢の骨折など）などの救急処置法について学修する。各処置のシミュレーションに関しては、救急処置研修用人体模型（シムマン）などを活用する。また、国際的に通用する医療人の実現の具体的手段として、欧米諸国のプレホスピタルケアの進んだ国々の有用な画像・動画、パラメディックスの紹介による啓発を行うとともに、その中で該当疾病・病態について、適宜、適切に紹介する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	救急医学系	災害医学	災害には、地震、津波、台風等の自然災害、列車・飛行機事故、戦争等の人為災害、その他の特殊災害があり、それぞれ様々な形態、状況、相（急性期、亜急性期、慢性期；救援期、復旧期、復興期等）が存在し、場面は多種多様である。それぞれの場面での適切な医療対応を構築・実践できるよう災害疫学の各手法を理解しつつ、身につけておくべき知識と技法、並びに評価さらには被災者への精神・心理的アプローチも学ぶ。	
		外科学Ⅰ	外科学の歴史的推移を概観すると共に外科学の日常臨床現場で用いられる各種専門用語とその意味を正しく学ぶ。次いで、外科学の基礎的事象である創傷、熱傷、凍傷、咬傷、外科的感染症、骨折、捻挫、ショック、輸血と輸液、外科の基本手術手技、麻酔の基本手順と方法、止血管理、心肺蘇生法等を習得し、外科学の応用的実践に結びつける基盤を形成する。	
		外科学Ⅱ	外科学が取り扱う主要な個々の疾患についての病態を理解し、臨床症状から外科的診断法、治療に至る系統的・論理的思考と具体的手法を身につけ、各種疾患の治療法の中で外科的治療の果たす役割りその意義、課題等を体系的に習得する。合わせて外科的手術の実践的方法・内容及び臓器移植、人工臓器、再生医学等の先端的医療を概観する。	
		外傷学	救急救命士にとって重要な外傷（頭頸部、胸腹部、顔面等）の受傷機転、病態生理、症状、必要な救急処置の知識、観察の方法と意義、などについて学修する。また各部位別の外傷各論について学ぶ。その他熱傷、電撃症、スポーツ外傷についても同様に学修する。 また、外傷によっておこる合併症（感染症ショック等）、及びそれらの治療法（輸血と輸液等）、脱臼と骨折、出血と止血についても学ぶ。	
		環境障害・急性中毒学	ヒトはある程度の環境変化には順応する能力を持っているが、それには限界があり、限界を超えると健康被害を生ずる。そしてこれらは、ふだん健康な人にも突然に襲いかかり、また医療現場からは遠く離れた場所で起こることが多い。その意味では、患者にとって、事故現場から医師の手に委ねるまでの過程が非常に重要となる。これは、急性中毒についても同様である。それらの現場に遭遇して、的確な行動を取るためには、日常の訓練が欠かせないが、その基本として、幅広い知識の習得が必要である。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	救急 医学 系	<p>救急搬送論</p> <p>一般負傷者、傷病者、災害現場における要救助者を安全かつ速やかに医療機関へ搬送するために傷病者搬送システムについて、搬送の歴史、救急行政の変遷、救急車内装備品の進化、搬送手段について学修する。 ドクターヘリによる搬送、船による搬送 至適医療機関の選定 病院交渉と関連傷病者ケアなどについても学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/15回)</p> <p>(① 朝日茂樹/13回) 傷患者搬送の歴史から行政、法令の進化、搬送手段の概要など傷病者搬送総論について講義。 次いで、救出から車内収容までと、搬送手段のうち、ドクターヘリや病院船による空路、海路搬送について講義する。 更に、一般救急車、ドクターカー、災害医療センター見学など救急医療現場について学修させた上で、搬送訓練実技・試験を担当、指導する。</p> <p>(⑤ 岡部綱好/2回) 救急車の進化、装備品、走行性能、緊急走行から病院交渉の進め方、搬送中の特定行為、医薬品選定など陸路搬送にすいて各論的講義を行う。</p>	オムニバス方式
		<p>小児科学</p> <p>受精卵から出発して胎児、新生児、小児（乳児、幼児、学童）、思春期にわたる、ヒトの発育・発達と生理学的特徴の変化を理解したうえで、小児の疾患についての基本的な知識を習得する。子どもは自分で自分の体の具合の悪いところをきちんと説明することができないことが多い。そこで、主要な小児疾患の症状や徴候の特異性の知識を身につく、重症化や生命の危機を回避するために必要な症状の観察法について学ぶ。また、それぞれの疾患の検査結果を解釈に必要な注意点、各疾患に関する救命救急医療の特徴について学修する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	救急 医学 系	産婦人科学 女性の生理と妊娠・分娩の生理を理解したうえで、婦人科疾患・産科疾患の病因、病態生理、症状について学ぶ。さらに、それぞれの疾患の病状の重症度、全身・局所の観察、各種病状の観察の方法と意義について理解し、悪化防止と生命の危機回避をするために必要な救急処置の知識・技能を学ぶ。また、産婦人科疾患の診断に必要な検査（各種病態に関する検査）と治療方法について学修する。 (オムニバス方式／全15回) (36 東哲徳／8回) 産科 母性の概念と特徴（身体的特徴、精神的特徴、社会的特徴）、現代における母性の特徴（母性と家族環境、女性のライフスタイル、少子化時代の母性）を学修し、さらに以下の項目について学修する。 正常な妊娠：妊娠の定義、妊娠の成立、胎児の発育 胎児の発育：胎児の付属物、胎児の位置と胎勢 妊婦の生理的变化：性器の変化、全身の変化 妊娠中の生活指導：精神的ケア、母子手帳の活用、栄養指導 分娩の生理：分娩の定義、分娩の要素、分娩の経過 妊娠の異常：妊娠初期～中期の異常疾患、妊娠後期の異常疾患 (37 塚田訓子／7回) 婦人科 女性性器の構造と性機能：女性性器の解剖、性腺・性器の発生と分化、月経周期とホルモン動態 内分泌異常・性分化異常：月経異常、月経困難症、半陰陽、性染色体異常 女性とライフサイクル：各ライフステージにおける疾患と性機能の変化、避妊法 性感染症：クラミジア感染症・淋菌感染症・性器ヘルペス・尖圭コンジローマ等、各疾患の理解 婦人科腫瘍・類腫瘍病変：子宮内膜症・子宮筋腫・子宮頸癌・子宮体癌・卵巣腫瘍（良性・悪性）等 生殖医療：不妊症・不妊治療・不育症 乳腺外科：乳腺の構造、解剖、良性・悪性の乳腺腫瘍 以上の項目について学修する。	オムニバス方式
		整形外科学 救急救命士が身につけておくべき、整形外科学の基礎知識と臨床現場に求められる応用知識と技法、急処置の知識と実践法、観察の方法と意義（重症度、全身・局所の観察、各種病状の観察）、検査（各種病態に関する検査）等について学ぶ。 整形外科学の歴史と概要について学修した後、運動器の臨床解剖（脊椎、上肢、下肢：臨床現場に必要な基礎的解剖知識）、整形外科的治療法（基本的診察の手順と方法）、臨床検査法（整形外科的診断に必要な検査の種類、方法と内容）、治療法（整形外科的治療の種類、方法と内容）、骨・関節損傷（骨・関節の主要な損傷の診断と治療法）、脊柱・脊髄疾患、神経・筋疾患、骨・軟骨腫瘍、整形外科リハビリテーションの種類、適応、方法と内容などについて学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	救 急 医 学 系	脳外科学	頭部外傷（軽症から重症）や 脳血管障害（脳出血、くも膜下出血、脳梗塞）の病因、病態生理、鑑別診断などを学び、救急現場の求められる脳神経外科救急を学修する。多くは 意識障害や痙攣などをともなうため 迅速な意識障害程度の把握（Japan Coma Scaleなど）、増加しつつある脳梗塞の診断・治療についても学ぶ。	
		精神医学	小児期から老年期までに発症する各種の精神疾患について学修する。精神疾患の成因とその分類、電気生理的検査、画像解析などによる診断と評価、統合失調症、気分障害などの内因性精神障害、神経症性障害、成人の人格・行動・性の障害などの心因性精神障害、脳気質性精神障害、中毒性精神障害、症状性精神障害、てんかんなどの外因性精神障害、精神遅延や心理的発達の障害などの発達障害、治療とリハビリテーションなどについて具体的に学修する。	
		放射線概論	目に見えない放射線の性質について正確な知識を持ち、自然放射線と人工放射線の違い、医療および日常生活への放射線の利用を理解する。放射線被曝による生物への影響を知り、原発事故後の現状もふまえて、放射線防護の知識を待つ。これらの知識を基本として、現在の画像診断学の主体となっているX線を利用したX線写真と、CT、磁石と電磁波によるMRI、放射性同位元素RIによる核医学、超音波検査を理解し、画像検査に必要な各種造影剤について基本的知識を持つ。最終的に、各画像が表している病態の意味を知ることが目的とする。	
		シミュレーション I	救急現場や傷病者の状況・実態等を理解するとともに、救急隊員が行うことのできる応急処置の内、傷病者・家族等に対する接遇、傷病者に対する観察・判断、各種救急資器材の取扱要領、人口呼吸、心肺蘇生、搬送法等等基本的な知識、技術を修得するとともに消防隊との連携活動要領を修得し、救急業務に対する理解を深める。 また、1年次に修得した「応急手当普及員」としての資格を生かし、さらに指導者としての役割を遂行できるようBLS（一次救命処置：Basic Life Support）の指導要領について修得する。 (オムニバス方式／全15回) (②小川理郎／3回) 救急処置概論、聴診、血圧測定、酸素飽和度測定要領、酸素吸入、心電計の取り扱い要領について講義及び実習指導をする。 (⑤岡部綱好／12回) 接遇、観察、判断、気道確保、体位管理、想定訓練、人工呼吸、心肺蘇生、搬送、隊連携等について講義及び実習指導をする。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	救急 医学 系	シミュレーションⅡ	救急隊員が行うことのできる応急処置の内、傷病者に対する観察、判断、包帯法・止血法・骨折固定法等の外傷処置を修得する。さらに、傷病者を医療機関に搬送するための手段として活用するストレッチャー等の取扱要領、傷病者を安静に各種ストレッチャー等に収用する要領、傷病者を収容したストレッチャーを階段・段差等を安静に搬送する要領、救急車内への収用要領及び救急車走行中の心肺蘇生要領を修得する。 また、シミュレーションⅠに引き続きBLSの指導要領について修得する。
		シミュレーションⅢ	救急救命士が行う特定行為に対する総合的理解を深め、心電計・喉頭鏡・マギール鉗子・除細動器、LM・LT・アイジェル・WB・コンビチューブ・硬性ビデオ喉頭鏡等の気道確保資器材、静脈路確保、薬剤投与など救急救命士として用いる各種資器材の取扱要領を修得する。さらに、実際の救急現場を想定した救急隊・消防隊等との連携、消防本部・救急隊指導医との連携及び指示要請等の実施要領を修得するとともに学生相互による生体に対する穿刺を修得する。 また、シミュレーションⅡに引き続きBLSの指導要領を修得する。 (オムニバス方式／全15回) (②小川理郎／9回) 特定行為、心電図、口腔内等異物除去、消防本部との連携、除細動、気道確保、気管挿管、静脈路確保、薬剤投与について講義及び実習指導をする。 (⑤岡部綱好／6回) 特定行為に関する接遇、隊連携、BLSの指導要領等について講義及び実習指導をする。

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	救急 医学 系	<p>シミュレーションⅢに引き続き静脈路確保・薬剤投与及び学生相互による生体に対する穿刺を復習修得するとともに、重症外傷傷病者に対する観察・重症度判断・救命処置の基本を修得した後、各種重症外傷事例を用いた想定訓練、複数傷病者発生時の想定訓練を修得する。なお、各想定にあつては、直近の事件・事故などで話題になった事案・症例等をタイムリーに用いたものとする。</p> <p>また、実際の車両を用いての交通外傷傷病者の車外救出要領、救急隊・消防隊連携要領、産科救急処置要領及び看護要領並びに在宅医療実施中の傷病者に対する処置等理論と基本的技術について修得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(②小川理郎/9回) 静脈路確保、重傷外傷、頸椎損傷、脊髄損傷、胸部損傷、腹部損傷、複数傷病者、想定訓練等について講義及び実習指導をする。</p> <p>(⑤岡部綱好/6回) 交通外傷、隊連携、在宅医療、産科救急・看護要領等について講義及び実習指導をする。</p>	オムニバス方式
		<p>シミュレーションⅠからⅣで修得した知識、技術を踏まえ、緊急度・重症度の判断要素基準を復習修得するとともに、救急現場において一刻を争う症例として心疾患、呼吸困難、脳血管障害、異物誤飲、一般外傷、単独交通外傷、多発外傷、代謝性疾患、熱傷、溺水、複数傷病者、アナフィラキシー、心不全傷病者に対する救急活動(出場・救急事故現場・搬送・医療機関収容)について、救急隊編成(3名)による活動要領を修得する。なお、各想定にあつては、直近の事件・事故などで話題になった事案・症例等をタイムリーに用いたものとする。</p> <p>また、シミュレーションⅢに引き続きBLSの指導要領を修得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(②小川理郎/4回) 判断およびBLS指導、心疾患、呼吸困難、脳血管障害について講義及び実習指導をする。</p> <p>(⑤岡部綱好/11回) 異物誤飲、一般外傷、単独交通事故外傷、多発外傷、熱傷、溺水、複数傷病者、アナフィラキシー、心不全、代謝性疾患等について講義及び実習指導をする。</p>	オムニバス方式

別記様式第2号（その3の1）

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部救急医療学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	救急 医学 系	<p>シミュレーションⅠからⅤで修得した観察判断、処置技術等を駆使し、実際の救急現場を想定した呼吸器系疾患、循環器系疾患、意識障害、創傷、腰痛・腹痛、脊髄損傷、複合疾患、脳血管障害、環境・中毒、異常分娩、薬物中毒、小児疾患、アナフィラキシー等の傷病者に対し、救急隊・消防隊・消防本部・救急隊指導医・警察官・関係者等の役割分担のもとに総合的な訓練、検証、再訓練等を行い、救急救命士としての活動能力を向上させる。</p> <p>また、各想定にあつては、直近の事件・事故などで話題になった事案・症例等をタイムリーに用いたものとする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(②小川理郎／5回) 呼吸器系疾患傷病者、循環器系疾患傷病者、意識障害傷病者、創傷傷病者、腰痛・腹痛傷病者に対する想定訓練について講義及び実習指導をする。</p> <p>(⑤岡部綱好／10回) 脊髄損傷傷病者、外因性及び内因性複合傷病者、脳血管障害傷病者、環境障害・急性中毒傷病者、アナフィラキシーショック傷病者、異常分娩傷病者、薬物中毒傷病者、小児疾患傷病者に対する想定訓練について講義及び実習指導をする。その上で各種症例検討を行う。</p>	オムニバス方式
		<p>病院内実習</p> <p>救急医療の最前線と言える救命救急センターを有する基幹病院で救急医療の実際を見聞し、救急医療処置の手順、方法はもとより、救急隊との連携の実際、チーム医療の重要性、救急処置後の医療について学修をする。</p> <p>高度救急救命センターには日夜救急患者が搬送されてくる中で、救急専門医、救急看護師、救命士が働いている現場で実際の救急医療の現実にふれることになる。実習に際しては、患者さんとスタッフの安全を最優先課題とし、特定行為習得に関する指導教官の指示に従って真摯に学修すること。</p>	
		<p>救急車同乗実習</p> <p>シミュレーションⅠ、Ⅱ、Ⅲで修得した救急処置技術と医学、医療に係わる知識を一連の救急活動として関連づけるために、救急車を用いて実際の救急活動を想定した実習を行う。</p> <p>また、救急同乗実習により消防署を訪問し、消防署の各部門の役割・業務、消防職員・救急隊員としての責務、消防職員・救急隊員の訓練状況、地元住民とのかかわり等を学ぶとともに救急車に同乗し、救急現場を体験することにより、救急救命士の行う諸活動、消防署における救急活動体制等について理解させる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	衛生 学 系	産業保健学	産業保健は一次産業から三次産業まで、全ての産業、全ての職域を対象とするが、産業革命以降の工場労働者で生じた多くの衛生上の問題を踏まえて最も体系化されてきたのは、被雇用者の、主に事業所における保健であり、本講でもこれを中心的な課題とする。総論においては歴史的経緯を踏まえた現行諸制度を概括し、現代の労働環境を取り巻く諸問題を整理する。各論においては職業起因性の様々な有害因子を順次取り上げ、それぞれが誘発しうる疾病、障害とその予防策について学修する。	
		環境衛生工学	環境衛生工学は、自然環境と人間活動との調和を考えながら、快適で健康な人間生活を実現するための学問である。さまざまな労働環境（オフィス、製造現場、有害業務等）が健康にもたらす影響とその対策、職場の労働安全衛生についての基礎知識と労働災害などについて学修する。多様な職場における働きやすい安全快適な作業環境を整備することで、働く人々の健康障害を未然に防止し、さらには健康の保持増進をもって積極的に安全衛生を確保する。こうした期待に応えられるように必要な技術的な知識や考え方を学修する。	
		職業適性論	職業適性についての内容や構造についての理解を深め、パーソナリティの側面と能力的側面の両方から、職業への適合性を診断できるようにするとともに、職業適性に基づく職業選択ができるようにする。また、各種の職業適性検査の理論と構造を理解し、検査の結果を診断するとともに活用できるようにする。さらに、適職診断の結果から職場の健康管理や安全管理、衛生管理に関する人事配置や人事管理への活用の具体的な方法について学修する。授業形態は、講義形式とグループワーク形式による課題解決型学習を取り入れて展開する。	
		労働衛生法規 I	本講義では労働災害や職業性疾患の発生機序と招来要因を学びつつ、それらを制御するために定められた法的規制、安全・衛生管理体制の実際について学ぶ。各法令について、とくに基本的な語句や概念の定義に関わる部分では、正確な語句の確認が不可避であり、逐条的な解説を行う。 業務上疾病の防止管理、労働適正管理、労働能力損失管理を主眼として作られた労働基準法、労働安全衛生法、作業環境測定法などの労働衛生法規の概要について学修する。	
		労働衛生法規 II	働く者の健康を守る具体的な法令は、労働基準法と、これより発展・独立した安全衛生法とを中心に構築されている。本講義では、労基法の意義と内容、労災保険法や労働安全衛生法の概要と諸手続、じん肺法および作業測定法の概要について解説する。あわせて、第1種衛生管理者の免許取得に対応することも講義の主たる目標として学修をする。	

別記様式第2号（その3の1）

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部救急医療学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	総合	インターンシップ	<p>企業、医療、福祉、教育、介護等の機関・施設等の一般社会の各種現場での実務体験を通して、将来の専門職の業務に資する社会性、コミュニケーション能力、臨機応変に対応できる柔軟さと行動力等を学ぶ。</p> <p>受講ガイダンスを行った上で、実習希望先と志願理由書を提出してもらう。実習希望先を決めるに当たっては、卒業研究のテーマなども考慮して受け入れ企業・機関とのマッチングを行う。実習に先立って派遣前ガイダンスを行い、また、事前課題として受け入れ企業・機関の概要、必要とされる専門知識・技能について学修する。受け入れ企業・機関から課題が課される場合もあるので、十分に準備をしたうえで実務を体験し、その成果をレポートや報告会で発表してもらう。</p>	
		卒業研究	<p>救急救命学の座学、大学外学修、病院実習などを通して、強い興味をもった研究課題、もしくは特定行為の技術習得の改善について、目的、方法、結果、考察、提言などの項目にわたり論文を作成する。さらにそのプレゼンテーションができる発表技術を習得する。課題についてまとめ、議論し、わかりやすく論述する能力を高めることを目指す。</p>	